
（ ）な灰被り

よづは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

() な灰被り

【Nコード】

N4571U

【作者名】

よづは

【あらすじ】

とある国に住まう、真つ赤な髪を持つ女がいた。彼女は父親が病気で（あれは病気だろう、嗚呼病気さ。病気以外の何者でもない）亡くなった（という事にしておこう！）後、再婚相手の義理の父親の連れ子に悩まされていた。町一番と噂される美貌の義兄弟、彼等に求愛されている。何時ものように二人の義兄弟をあしらひ、実母にいびられ、何かと苦勞の毎日だった。そんな日常が、城からの届いた知らせにより変化する！《シンデレラ変形物語！色々いじくつてオリジナリティを出しています但し基本ストーリーは原型と変わら

ない！愛あり恋あり真っ黒な話から家族愛まで！意外とボリュームあるかもしれないシリアスラブコメディ！》

1：主城とある一軒家での会話（前書き）

はい、前回（退会前）に一度投稿していた作品です。
けっこう進んでいますけどまだ完結していません！
かなりノロイ進行ですがよろしく願います！

（ミスなど発見しましたら報告お願いします。）

1：王城とある一軒家での会話

栄華を極め続ける大国を治める、城の玉座。

其処での遣り取りは、逢瀬を重ねる他国の王子には見せられぬもの。

「姫様、この贈り物はいかがいたしましょう？」

【姫】。そう呼ばれ、玉座に座るのは闇をも明るく思わせる黒髪の少女。その瞳は赤く燃え上がる太陽の様だった。

その瞳に直に見詰められ、魅了されないで居られるのは彼女の横の立ち尽くす王族付召使だけだろう。

姫は目線だけを調度品へ向け、そうして吐き捨てるように言う。

「燃やしてしまえ」

唯、その言葉に忠実に従う王族付召使。城の敷地内から白き煙が立ち昇るのは何度目か、大国の姫へと逢瀬を重ねる王子たちも一体何人になったのだろうか。町の人々は城を見詰めそれだけと思う。

そんな中、公布された知らせと手紙は国を震撼させる。

街を見渡す事の出来る丘の上に、貧相だが普通の一軒やより少し

大きいぐらいの家がある。

そこでは静かに、公布された手紙を読み上げていた男が居た。

「姫様はつまらない事がお嫌いらしい。」

そう口にするのは義父、最近の知らせにより玉の輿に躍起になっている。息子を使って自分は左団扇にウハウハを夢見ているそう。

「はあ、だから庶民から夫など取ろうと言う五月蠅いことになったのか。」

その言葉を放つのはフェール義兄さん

「わがまま姫様に振り回されるかわいそうな夫、と言うところののかな」

続けるのは二番目のアルフェール義兄さん、二人とも町で評判高い色男だ。が、

『甘いマスクで女をメロメロにさせるのだあ!!』

などと豪語している所は、何故か噂には流れない。長男と

『灰被り以外は興味ない』

などとはざく危ない次男は、はつきり言うと女には余り興味が無い。

実際、興味があるのは女が自分に落ちるまでで、今は一度振った私にべったりだった。

「うん、興味ない。」

「何!」

何故かと言うかやはり即答するフェール義兄さん、冷めた顔して綺麗な笑顔つて、鬼畜ですね義兄さん。

「同じく、灰かぶり以外は」

アルフェール義兄さんは特に興味のなさそうな顔をする。

もともとそんな顔をしているけど……、義兄さん。最後の「灰被

り】の部分だけは何故、頬を赤らめるんでしょうか。気のせいだと思いたいけれども見えて、尚且つ明らか過ぎだ！！（気のせいだと思わせてくれ！）

「お前ら、姫だぞ、玉の輿だぞ。お前らが姫を落とせば何も不自由は無いんだ！お前たちなら簡単だろう！！！！」

「だから、ね。障害が無かったら面白くない」

それも如何なのかと思う言葉。それだけ言うと長男は窓の外から覗いていた私に視線を送る。

途端、義父に向けていた表情を一変させる二人の義兄さん。毎度思いますが、何故そんなにもキラキラした目でこちらを見てくるのでしょうか。こちらとしてはとてもとても不快なんですけど…。

そしてほんの一瞬経って、

「シンデレラちゃんああん！！でーとしょお？」

長男が顔を緩ませ微笑みかける。

その笑顔は無邪気すぎて、私が何も知らなかったら一発でフェアール義兄さんの虜だっただろう。

窓の外で薪を割っていた私に駆け寄って来て、窓から身を乗り出してくる。思わず怪訝な顔をすると、その顔に太陽に輝く綺麗な長い金髪が掛かる。

「義兄さん、鬱陶しいその髪、ちょん切っちゃって良いでしょうか？」

私の言葉にフェアール義兄さんは相も変わらない笑顔で手を伸ばす。

「シンデレラちゃん、敬語はやめてって言わなかった？」

伸ばした手は何時の間にか腰に巻きつき、強く抱き寄せられていた。
……………窓越しに、（手え長いな、おい）

「義兄さん、邪魔です。」

抱きつくならせめて外しやすい窓の外に来て欲しいものだ。それともそれを知っていてわざわざ抱きつきにくい窓越しに抱きついているのだろうか。

「え〜？ シンデレラちゃんがこっちに来ればいいんじゃない？」

そしてより一層私を抱き寄せる義兄さん。全く、

「鬱陶しい。」

一瞬、心の中を出してしまったのかと思ったが違った。

「髪どころか首もちよん切っちゃて……………いいかな？」

何時から私の後ろに居たのか短い灰髪の次男、アルフェール義兄さんは物騒な事を言いながらフェア義兄さんから解放、してくれたのだが…。

「アル義兄さん、貴方も離してくれませんか？」

何故か。アル義兄さんも後ろから腰と両腕を掴み、抱き寄せていた。しかもそのまま私の赤く長い髪に心地良さそうに顔を埋めてくる。

「貴方なんて、アル義兄さんだなんて、ポイント高いけれど、【アル】って呼んで？」

囁くアル義兄さんの息が頭に掛かる。意味が分からない、本当に解らない。『ポイント高い』って何がだ？

「呼びません。」

薪割りの邪魔ですからと言う私に、フェア義兄さんは溜息をつく。
「…麗しい乙女がそんな事しちゃあ、駄目だよ…」

その言葉を聞いているうちに、アル義兄さんは腕を離すと同時に何かを何処から取り出して私の前に見せる。

「もし、するんだつたらこれを着て。」

その取り出された服を見てフェア義兄さんは感嘆をもらす。

膝より少し高いところまでの短めのスカートと言うかドレス。しかも裾に純白レースがふんだんに使われた基礎的なカラーは黒、所謂【黒ゴス】と言ったものだつた。

「【黒ゴス】。ゴシック・ロリータと呼ばれる、幼い印象を抱く衣装の事。主にフリルがふんだんに使われた人形が着るような衣装を指すことが多い。【黒ゴス】の「黒」とは黒を基調にしたものをさす。詰まり、正式名称は「黒ゴシック・ロリータ」である。」

「いえ、解説は結構です。フェア義兄さん。」

何故か何時も絶妙なタイミングで解説を入れるフェア義兄さんは、マニアックな事に詳しい。そんなフェア義兄さんの解説にアル義兄さんが付け足す。

「袖は一応【萌え袖】、手が微妙に出ないやつ。」

余計作業がしにくいです。と言い切るとフェア義兄さんが残念そうな声を出す。

「そんなあ一回ぐらい着ても良いじゃない。こっちでその様子見てるからさ」

そんな義兄さんにアル義兄さんは同意したように激しく首を縦に振る。だけど私の心は変わらない。理由は幾つか、その一つが。

「その丈、下着がギリギリ見えるような長さにしてるでしょう。」

途端、二人は目を逸らす。

知ってんだよ、『シンデレラちゃんの足丈の四分の一ぐらいに調節すると【パンチラ萌え】な状態になるよ。』とフェア義兄さんが言ってた事ぐらい。

「……変態シスコン野郎共が、」

「ちよつ、今【シスコン】って言った？」

「【シスコン】、一線越えると、禁断の愛。……いいつ……！」

「【義兄さん】、いや、【お兄様】って、よんでええ！」

貶したはずなのが二人はむしろ『シスコン上等！』といった具合に絡んでくる。この二人には「自尊心」とやらないのか。

（…シスコンの解説はないんだ…。）

「どうしよう」

二人には聞こえないぐらいの声で溜息をつく。だが、

「てめえ！麗しのお兄様どもに絡まれて『どうしよう』ったあ、どういつ見だああああああああああ」

予想駄もしないところからの罵倒を喰らって驚いて上を見上げる。見えたのは恍惚とした表情、じゃなくてこれは窓から降りてきたフェア義兄さんの顔。その向こう、二階の窓から覗く赤毛の絶世の美女。

「母さん」

その怒りを浮かべた顔に少し慄く、だが其処で引くとまた怒声が響く事になる。

「おや、お母上様。今日は少しだけまともな様で、」

あれ？と首を傾げてフェア義兄さんの発言と母さんの聴覚を疑う。

確か、母さんは二階の窓際に居て今の声は兄さんたちには聞こえてないはず……。そんな事を思っている間にアル義兄さんが話し出す。「邪魔しないでいただけますか、今、シンデレラを食そうとしておりますので、貴方が口を挟むと、逃げられてしまいます。」
今度は明らかに母さんを貶していた。それを罵倒しようとするが、その前に。

「誰が食されるかあああああ!!！」

口を開くと自然でた言葉だった。

嗚呼、母さん。私は確かに貴方の血です。先程の母さんそっくりの罵声があたりに響き、兄さん達に放って置かれ寂しそうにしていた義父さんが脅えている。

アル義兄さんの鳩尾に肘打ちをクリーンヒットさせた後、シンデレラちゃん俺が代わりに食してあげるよ。なんてぼざくフェア義兄さんを無視して、母さんの方を見る。

窓際に居る母さんは、

……………飛んでいた。

「いやあん、フェアちゃん達、冷たいわ。でも良い！冷たすぎて火傷しちゃいそう、腐腐腐腐腐腐腐腐。禁断の兄弟愛かしらあああん、」

「いや、肉体的にはそこに居たのだが、意識は何処か遠くへと飛び去っていた。

前言撤回、やはり貴方と同じ血は流れてなさそうです。

「シンデレラちゃんあん、無視しないでよ。お母上様なんてみてくれだけなんだから、シンデレラちゃんが羨ましいんだよ」

何時の間にか目の前にまで顔を寄せていたフェア義兄さんに一瞥を投げかけると再び母さんへ目をやる。今度は意識もちゃんとあつ

た。が、

「誰がみてくれただけだって！？シンデレラ！あんたなんて暖炉に入り込んで灰被^{シンデレラ}つてたじゃないのお！やつぱりあんたは『灰被り』よ！」

言っても無い事を私に言ってくる母さん。（それを言ったのはフエア義兄さんです。）

：元来なら、継母がいびるのだろうが、残念ながら病（『得腐腐腐腐腐腐腐、ホントに可愛らしいねえ』なんて言いながら娘に『お父様、もつとかわいがってほしいですう』なんて危ない事言わせる奴が病んでいないとは言えない。）で、亡くなったのは父で（『もう、ロマンは人には理解されない！』なんて言い捨てて地平線の彼方へ走り去ったのはもう父としては死亡扱い）義父がいびると言う可能性は始めの二人の義兄さんの反応で皆無となった。否、もともと義父はヘタレなのだが。

このままでは埒が明かない、そう思ってもう一度母さんを見据える。

母さんは、ああん？何ガン飛ばしてんじゃとでも言うように折角の美貌を極限まで醜く崩していた。

その母さんから受け継いだのは見事な赤毛と強気な根性だけではなかった。そう、母さんの最上級にして唯一の武器。

【美】だ。

頬の筋肉を綻ばせてから、そっと上げる。鋭いではなくフェア義兄さんのように甘い、甘い笑顔を――、

私には母さんだけではなく病気の父の血も入っている。父は精悍な顔立ちだったそうで私はそれを色濃く受け継いでるため、私自身

がそう振舞ってしまえば誰も私と解らない。

そして浮かべた顔は母さんの頬を緩ませる。

（シンデレラちゃん、【あれ】で（みてくれだけの女のハート）打ち落として、）

フェア義兄さんがそう耳に囁く。言われるまでも無く私は既に行動に移していた。

「すみません、美しい方。どうやら私は貴方様のご機嫌を損ねてしまいましたか。」

口から出るのは静かな男の声。途端、母さんは顔を真っ赤にする。

「あら、何時いらつしやったのかしら【月下の君】。先程の言葉は召使に言った事ですよ。すみませんね、どうぞ上がって下さいませんか？お話したいわ。」

母さんは病だ（【腐】ではあるがそれではない）、私を私と気付かない。何時からか、一人芝居にも気付かなくなった。その上、もう私を可愛がる事は無い。

母さんにとって、私は【父さん】で。父さんは死んだ事になっているから……。

（【腐】。正式名称【腐女子】稀に【貴腐人】と呼ばれるが、年齢に関係なく【腐女子】と呼ぶ。マニアックな世界に詳しく、またそれらを好む女の人の事。俗に【同性愛】や【特殊プレイ】と言ったものを好む人と限定される事があるが、公にいけない卑猥なものを

好む女の人を指す。」

（だから解説はいいです。）

本当に何故こんな絶妙のタイミングで解説を入れるのだろうか、感傷すらも何処かに吹っ飛んでしまった。

「いえ、【紅の姫君】、わたくし私は立ち寄っただけですから、そんな厚かましい事、折角のお誘いですがお断りいたします。」

「あら、残念、では、このままでも良いでしょうか？お話だけでも……」姫、

「私はこちらのフェアール殿にも私用が御座いまして……」

「いやん、（禁断の同性愛！？しかも逢引、人妻とその息子で二股！？）それじゃあ、お邪魔でしたわ、またお会いできますかしらあ？」

なんだか、また飛びかかっているが私は止めを刺すつもりで最上級の笑顔を浮かべる。

「ええ、麗しの姫、時と運命が私たちを引き裂こうとも、必ず。その瞳に私の姿を映して見せましょう。」

ずきゅーん！まさにそんな効果音が似合うように、母さんは窓枠から消え去る。その後ドサツ、と言う音が聞こえたのだからベッドに倒れたのだろう。そんな破壊力があつたらしい。

「さっすが、シンデレラちゃああああああああん……！」
フェア義兄さんは何故か大絶賛、ちなみにアル義兄さんは未だに地面で気絶している。（そんなに強くやったかな？）

と、言うよりも、【あれ】の何が良いのだろうか。あんなに窓が真っ赤になるぐらい鼻血を吹くなんて……

「持っていないモノを理解する事なんて、出来るはず無いかな？」

本当に解らない事ばかりでこれからのことも、分かるはず無いけど一つだけ知っている。

“これからも、大変だ”

2: 脱出、姫様の市場デビュー

太陽が高く、日差しが暖かい時刻。美しく整えられた芝生を踏み荒らすものが一人。それは、庭を荒らす人種には思えない美しい姿。緑の黒髪にこの国で唯一、真紅の瞳を持つ人物。

♪
♪
♪

鬱陶しい長い黒髪を振り乱して、私は庭を駆け抜ける。

「はっ、！ 結婚なんて冗談じゃあない。」

茨の塀越しに時々見える窓に写るのは、国王の血の証。この国を治める者の象徴。

真紅の瞳。この瞳で見詰められた人間は全て、その人間の虜になる……って

[illegible]

おかげで外交のときに出会つた男は全員年齢関係なく求婚しに来るし、毎日毎日隣国からの貢物で王座はいっぱいだし。拳句の果てには『ウザイ』の一言で『それではいつその事国民から選んでしまえば良いのでは?』なんて王室付召使の白髪若作りじい爺が言い出す始末。

ちやつかりと御触れ出して、順調に舞踏会の準備は進んでいるよ
うで。おかげで逃げ出しやすかったわよ。

白髪に紳士的な振る舞いが評判の中年男。少し顔に皺が多いけれどそれがまたダンディと言う噂。

年いっちゃって白髪になったけれど白髪染めは『臭ー』と私が言ったからそのままにしてたら、後が大変になった年寄りのクセに、生意気。（まあ、私の瞳が利かないのは今まで爺だけなんだよねー。そこだけは認めるわ。）

まあ、ともかく。

昔、召使見習いたちと遊んだときの抜け道は未だに残してある。私はそれを目指している。

茨の道は人を傷つける。だけど、大切な物を隠してくれる。

茨の向こう側、そこに小さな穴が開いている。二十センチはある城壁に何故にこんな穴が開いているのかは解らない。子供だけじゃあなくて、私ぐらいの年頃の女の子。詰まり十代の子供と美しい体型の女性なら大体は通り抜けられるような穴。

「……好都合よね……」

城内には基本、私のように瑞々しい肌とくびれを持つ若い子なんて居ないからね！

外壁の穴を潜り抜け、ドレスの汚れを払っているところで気が付いた。

「……着替えて来ればよかったかしら……？」

だけど、外には中々出ない出不精の私が地味な服装になんて着替えたら、あの変に目ざとい爺が気付くに決まっている。

それに、出てしまったんだから別に良い。

「一先ず、町よね。」

城があまりにも広い為、庭にある城壁の穴は町から少し外れた、林の中にある。この位置は返って都合が良い。私は黒く上質なドレスの裾をたくし上げ、走り出す。

習った教養からは絶対に得られない足の速さ。私は【御転婆】だと言われていた昔の自分を、誇りに思う。

町に出て、何をするかなんて考えていないけれど、とりあえず御触れについての町での意見を調べて、町を満喫しようかと思っている。

「まあ、爺おやの机からお金は盗ぬすって来たし。」

性格に見合わないといわれた自分の手先の器用さを、再びに誇りに思う。

♪ ♪ ♪

「フェア義兄さん、すみませんが洋服を貸していただけませんか？」

今日はやけに大人しかった母さんが実は昨日の余韻を引き摺っているのに気付いて、落ち着かせ。ついさっき眠りに落ちた母さんの部屋の掃除と戸締りを確認した後、買い物に行こうと思い、髪を一つに纏めてからフェア義兄さんの部屋を訪ねたのが今。

ちなみに、訪ねられたフェア義兄さんは張り切ってクローゼット

からピンクのドレスを引き出そうとしている。

「それ、止めてくださいね。」

何処か残念そうな声を上げる義兄さんに私は強気に言う。いや、こればかりは強気でないと大変な目に会うのは私だ。

「義兄さん達がつかえひつかえ適当に手を出しているから、町中元恋人だらけになったんでしょ！ 彼方達の所為で私は毎回殺されかけてるんですよ！？」

大げさだなあ、っと呑気に笑っているフェア義兄さんの顔面を本気で殴りたくなってしまった。

冗談だったならどれだけ良いか。

町でこのまま出るとこの家の【灰被り】だと、誰もが気付いてしまう。血も繋がっていないのに一つ屋根の下で暮らしている私がただでさえ羨ましいのに、私にぞっこんで周りの女には蠅ほどの興味もない状態なのだ。町に溢れかえる恋人達は私を本気で恨んでいるだろう。

何しろフツているのだから。

比喻だったとれだけ良いだろう。【殺されかけている】。

実際に今にも殺されそうだった。

強烈な香水をつけた女性に大量に囲まれて、息が詰まり。（呼吸器的な意味で）豪勢なドレスと物凄い剣幕に迫られ、圧倒され。（圧迫とも言う。）最終的には手が下されるという。（処刑的な意味で）

そんな状況を都合よく回避し、さらには買い物に素晴らしい益を齎す方法が、一つあるのだ。

「だから、義兄さんの使い古しても良いですから男物を貸してください。」

母さんの時と同じだ。

何せ惑わせば良い。義兄さん達のまねをすれば流石、恋人だっただけあってよく効く。

渋々といった様子で男物を適当に選ばうとする。でも、どう見ても乗り気ではない。

私はまた仕方なく話す。少し前アル義兄さんがフェア義兄さん対策に教えてくれた方法だ。

「義兄さんでないと…（サイズの）駄目なんです……。」

うるると少し、上目遣いで義兄さんを見る。義兄さんは何処か張り切った様子で中々に上質なと言つか、つい最近新調した黒を基調としたものを取り出してきた。

私が着るにはもったいないと思うが、だがこれで何か言うともっと面倒な事になるから止めておこう。

「これ、最近新調したでしょう。……良いんですか？ これで……面倒だと思うのだが、それでも一応確認する。すると義兄さんは立て指を突き出して宣言した。」

「勿論！ シンデレラちゃんに着られるのならビジネススーツや舞踏会の取って置きも惜しくはないっ！」

またシスコン発言の羅列が始まりそうだったので、一礼をしてさ

つさと扉を閉めた。

#

町は中々に賑わっていて、人が多かった。

「信じられない…、まるで舞踏会場だわ…」

産まれて初めて、市場を見たお姫様はこう呟いた。
きよろきよろとしている内に、簡単に人ごみに飲まれ倒れ、そして少し開けたところで今の状態を改めて認識し直しているところだった。

「こんなに、この人達はお店で何を求めているのかしら…？」

沢山の人たち、その人たちが主に見ているのは果物など。それも真つ赤な瑞々しいものなどと言った、上品と言うよりは新鮮と言った名が相応しいものばかり。

「こんなの、見たことがない……………」

思わず近寄り、その果物を凝視していると突然、肩を触れられた。
「なっ……」

突然の事に、叫びかけるが、顔を上げたそこには人の良さそうな男が立っていて。中年男性で…恐らく、店の人だろう。

真正面から向かい合い、とりあえずこの人物に話を聞く事にした。

「……お嬢ちゃん、もしかして…これ、食べた事がないのかい？」
差し出すその手には、凝視していた果物が…。実を言うと、果物

の名前や味は知っていても、原型は知らない。

何時も何時も何時も、目の前に出されたのは調理した後の残骸。美味しい【焼き】林檎、やチェリー【パイ】。原型がないものばかり…………

あまりにも興味心身に凝視していたからわかってしまったのだろうか。ほんの少し、興味を持って首を縦に振る。

店の男はやはり気が良さそうに私の手を掴むとその果物を摘ませる。

滑らかな角のない形、真っ赤な宝石に様な色彩。そして——芳しい香り…………。

「おいしそう…………」

「ああ、どうぞ。代金は要らないから、これはこの市の中で一番の林檎だ、うまいぞ。」

「へえ、これが林檎…………」

口を近付かせ、そのまま齧りつく。

シャリッ、

中々耳に心地の良い音がして、赤い実の中から白い甘い物が見える。そこから、溢れ出す。甘い蜜。

「…………王宮付調理人のデザートより美味しいかも…………」

「おやおや、中々褒めてくれるじゃないか。まあ、俺のこの自慢の林檎も、【灰被り】の手に掛ければ、気絶するほど美味しくなっち

まうんだがな。」

「氣絶——！」

知らなかった。町では美味し過ぎると氣絶してしまうのね。これは、精神的なものなのかしら。それとも肉体的なもの……？ 一種の持病かしら。もしかすると、【灰被り】って言う人が毒を盛っているのかも。

（……城下はなんて怖いところなんだろう……）

まあ、私が世間知らずだって事はほぼ幽閉状態だった自覚があるからよく解ってるんだけどね……。

いけない、本題を忘れるところだった。

私は人の良さそうな事店の男に聞いてみる事にした。

「あの……」

「ん？ なんだい、お譲ちゃん。」

ぼんつ、と条件反射に近いスピードだ返ってきた店の男の声にまあ深くは考えなくていいかと思い、そのまま聞いてみる。

「【御触れ】……どう思います……？」

男は少し悩んだ顔をするが簡単に答えてくれる。

「ああ、あの【舞踏会】ね。いやー、俺には縁のないことだ。招待はされたが、姫様のお相手探した。ご馳走以外に何ら徳はない、俺みたいな奴にや関係ねえさ。」

「そう……」

少し安心した。どこぞのロリコンや変態が来るかもしれない、冷や冷やしていたのだ。だがこの男の言葉によると自分ぐらいになると絶対にお相手なんか出来ない、解っている様ではなっから行く気がない。

（思ったより、いいんじゃない？）

この状態だったのなら、きっと若い人間の中にもそれをわかって来ない人間も要るだろう、そうだとしたらかなり人数が減ってもしかすると婿養子の話は無しになるかも…！

「良かった、爺の机のあの【御触れ】に関する手紙…。あの招待状の山…！ あれ見たときには失神しそうだったもの…」

ブツブツと何かを呟く私を尻目に、と言うか完全に初めから気付いていない様子で店の男は言葉を続けていた。

「いやー、やっぱりあの二人は行くんだろうね。かの有名な、【あの】レイファール兄弟だ。」

男の言葉に思わずその胸倉を掴み引つ張る。

「だれっ！！！！」

変な、そして不吉な汗が背中を伝った事で少し慌ててしまった。ただど店の男は驚いた顔をするだけでたいした反応はしない。

「いや、女タラシで有名な兄弟さ。その辺を歩いている少しばかり綺麗な女は大体二人の元恋人だから、聞いてみるといい。美人と聞くと落としたくなるそうだよ。ついでに言うとな、二人に落とせない女って言うのはこの国では姫様と【灰被り】しか居ないから、若者達は【舞踏会】の為に己を磨いてるよ。」

つまり、二人が落とせない人間しか、恋人に出来ないこの国の若者達が、私の夫の座を狙っていると言う……

「――っなんて迷惑っ！！」

その叫び声は市場中に響いた。

その声に反応したのは、目の前の店の主人だけではなく、道を歩いていた。

「私って、レイファール様達にとって、ご迷惑なのかしら。」
と思い悩む、

哀れな捨てられたハイエナの一人。通称【ストーカーちゃん】（てか、マジでレンファール兄弟のストーカー）の耳にも届いていた。

3：ハイエナの群からの脱出

ようやく、家の外で張り込んでいたアル義兄さんを撒いてついた城下の市場。見回して視界に入る店の主人達^男が頬を緩ませているのは、一体何故なのか。

とりあえず野菜を買った店では

「ああ、目の保養。」

値切ろうと張り切っていた肉屋では

「何だ、あの魅惑の赤い瞳は……」

と、ほうけた言葉しか聞こえなかった。その為、買った野菜の数と金額が釣り合っていないかったり、肉の量がやけに多かったりと、こちらには得しかない様な事が多々あった。

（赤い瞳……か。）

今、この国で赤い瞳なんて、一人しか思い浮かばないけれど……。

（まさか、ねえ？）

そんな人がこんな所に居るわけがない。うん、昔なんか父さんの仕事の関係であったことがあるけど……確かに可愛かった。あれなら今頃はかなり綺麗になっているんでしょうね！。

「赤なんてどぎつい色、あんまり人が持っている色ではないですからねえ。」

と自分の髪色を棚に上げて市場を歩いていた。

後は、パン屋ですかね……。小麦を買わなくては。

そんな、穏やかな日常。町には男装さえすれば来ても問題はないし、義兄さんたちにも解放される、一番買ひ物が穏やかな時間。そ

んな、静かな幸せを噛み締めて、青い空を見上げてパン屋へと向かっていた。

「なんて迷惑!!」

突然の叫び声が聞こえた。

ああ、元恋人さんの一人が私の事で愚痴っているのかなー。出来れば静かにしてほしいけれど、別に私に迷惑が掛からないならいいじゃないですかー。そう、自分に言い聞かせ、背筋を這う嫌な予感を全力もってスルーしようとするが。

「何いつてんよ! あんた、聞いてたんでしようが!」

ここからは大きな声でないと聞こえないようだが、さつきから歩いているうちにその怒声が近付いている気がする。

(嫌な予感がしますねー)

遠回りでもしようかと思っただけれど、どの範囲で言いあっているのか解らないし、その上そんな状態で遠回りすれば確実に時間に間に合わない。

「……………仕方ない……」

はあ、と溜息をついてその怒声の中を全力スルーしながら通り過ぎる事にした。

「誰もあんたなんか聞いてないわよ!」

ん? 確かこの声はうちによく来ていた元恋人二十七番、【スト

「カーちゃん」じゃあ……

一番出会いたくない人間の声を聞いた。あの人ったら私に一番突っかかってきたんだよね！。『アンタなんか灰の価値にも満たないんだからね！』なんて……どーでも良いですね。私には関係ないことですし……

「私も言っていないわ！ 貴方が勝手に勘違いしたんじゃないわ！？」

……この声は知らないな、誰だろ。何だか本当に近付いているようだった。現実逃避のために空を見上げて、それでも勝手に耳に入る声に意識を傾けてそのままパン屋へ向かう。

「っ！ 何よ！ 偉そうに！ 私はね。もう二年もレイファール御兄弟の側に居るのよ！」

そうだね。一年と半年は義兄さんたちの意志と無関係に、だけど。「はっ、そんな一国民の人間と一緒に居る事がそんなに偉い事なのかしら？ 第一、私はその【レイファール御兄弟】とやらの事をついさつき知ったばかりだし、そんな街中に元彼女が居る変態を非難する以外の言葉は持たないわ……！」

勿論、そんな奴に執着する貴方みたいな人間にもね！ と言う声の主には私は惜しみないほどの絶賛を送った。

素晴らしい！ まだこの街にはそんな人間が残っていたんだ……。そう、微かに瞳に涙が溢れてきた時だった。

「痛ッ！」

「あっ、すみません。」

何かにぶつかった。そしてそれが何かしらの音を出したもののだから条件反射で謝った。

「何よドン臭い！　その真っ赤な眼はまるで厭らしい【灰被り】の赤その物だわ！」

「はい．．．？」

聞こえた【灰被り】と言う言葉に、これまた条件反射で返事を返してしまっただ。その声の先には…

「ああああああああっ！！　レイン・ライナー様！！
…赤面する、【ストーカーちゃん】が居た。」

「いえ、別に貴方の美しい赤毛の事を言っただけではないですわ。私はその厭らしい、小娘の事いいましたの。この娘、先程から店のものを骨抜きにして回りましたの。この市場の風紀を乱すものを贖罪するために、こうしておりましたので…。嗚呼！　それにしても今日も麗しいお顔でいらっしゃる！　レイファール御兄弟とも引け劣らないその麗しい微笑でこの私めの心を潤してくださる為にやってきましたの！？　確かレイファール御兄弟のお宅の近くにお住まいだそうですね。あの醜い【灰被り】に誘惑はされていませんか？　もしそうならこの市場にて最高権力を誇るナイリー二家の次期女当主、アイリーナにご相談くださいませ。私の総力持つて貴方をお守りいたしますわ！」

このいきなりのマシンガントークをまくし立てられて、笑顔で居られるのは義兄さん達だろう。私はせいぜい苦笑いする程度だ。

それは先程ぶつかった、（どうやら人）人も同じのようで私のぶつかった腕の直ぐ横で、顔をしかめていた。

その瞳は赤く、美しい容姿。幼い日にこの目に焼き付けたあの麗

しい姿…

（姫様…？）

あの時と同じように、胸の奥が熱くなるのを感じた。

#

「…ええつと…」

改めて正面を見て、輝かしい笑顔を向ける今日初めて本名を知った【ナイリーニ・アイリーナ】さんに、私は戸惑う。

（どうしよう！）

恐れていた事態だ。一度バツタリ出会してしまつて、自己紹介したのが運の尽き。それで降出会つたら何時もこうだ。しかも今は何時の間にやらちゃっかりと、私の両手を握っている。

その捕まれた手を見て唐突に思い出した。

（この手袋…）

昔、^{異名}同じ事をして父にとられた手袋によく似ている。義兄さんたちが私の気を引こうとしてこぞつてプレゼントを贈りに来た時があつたつけ…

結局、まともに受け取つたのはこのシルクの手袋だけだ。（ちなみに受け取られなかったプレゼントの数々は全て義兄さんたちの手で^{配給}処分された。（元彼女に））

一部分、銀糸を織り込んだこの手袋は月明かりに輝く。その輝きは運命の相手を引き寄せるそうだ。

（…女を見境無く引き寄せている気がするけれど…）

掌は大きいがその指は中途半端に細い為、中々手に合う手袋がな

かったようで完全なオーダーメイドの豪華な手袋だった。

「……なんなのよ、城下ここは……」

腕の側での眩きで現実に戻された。危ない危ない。迂闊に考え事なんてしていたらそれこそ貞操の危機だ。（正確に言うなれば命の危機だが）

ひとまず深呼吸をして、アイリーナさんの手をそっと私の手から離させる。そして右腕を横に垂らして微かに隣のその子を触れる。中々、敏感なようで直ぐに私の方を向いた。ちらりと、アイリーナさんを見て微笑んで見せた。すると、勘は良いようで、直ぐに小さく頷いた。

それを見て、安心して私は作戦に出る。

「……アイリーナ嬢、この私めが口にするのも何ですが……」

跪き、アイリーナさんの手をとる。

「女性は、御淑やかに。……ですよ」

軽く手のひらに口付けて、彼女を上目遣いに見つめる。すっかり頬を赤らめている。それでも私の言葉は続く。

「私も、男として生まれましたから女性に守ってもらおうというのも好い気がします。それもこんなに美しい方なら、尚更……」

あたりに黄色い声が響く。言い争いを見に来た元彼女で構築された野次馬がどうやらメロメロになっているようだ。

「それでも、守りたいものなんです。貴女が心配する分だけ私も又、貴女を思っ心て病ませているのです。」

うつとりとしたアイリーナさんを一瞥してから立ち上がる。アイリーナさんは突然のことに驚くが。………やっぱり、抵抗があ

る。だが！

アイリーナさんの腰元に手を回して、抱き寄せる。

「ですから、そんな物騒なこと。口にしないで頂けますか…？」

どこか悲しそうに、やわらかく微笑み。その口紅の塗った線られた唇に人差し指で軽く触れる。

「はっ…、はい…」

何処か腰の抜けかような声を出して、気絶してしまった。やり過ぎちゃったかな？

まあ、この位が丁度良いかな。アイリーナさんを野次馬の一人に『お願いしますね？』ニコリ、なんて言って渡す。するとまるで壊れ物のように大切に、それでもしっかりと抱き込んだ。

（うん！ 上出来！）

で、さっき私の隣にいた姫様？ を探すと…

野次馬の微かな隙間に突っ込んでいた。
「…危険だ…」

何をしている。そんな見るからに通って下さいな所を通ったなら…

「……っ、小娘がつ！」

嗚呼、やっぱりこうなった。

姫様？ は野次馬（ハイエナとも言ふ）に囲まれ、襲われかけている。さしずめ、狼の群れの中のひとつ…

「退きなさい！」

……いんや、小さな狼の群れの中の猪だ。中々互角な戦いを繰り広げている。

「私達のレイン様に近づいて、尚かつ逃げだそうだななんてそんな都合の良いこと出来るはずがないでしょう！」

「知らないわよ！ 第一あの男は私にぶつかってきたのよ！」

「どうせ、それもぶつかっていった。間違いでしょ！？」

「なんにも分かってないくせに口出しすんじゃないわよ。派手女——っ！」

おお、凄い。姫様？ 見事に言い返している。その上無関係に口出した【派手^{はでうし}っ子】ちゃんを見事に貶している。

「って…！」

そんな場合じゃない。このまま行ってもまずい。野次馬の向こうには必ず、

「来たわね。この売女。」

…やっぱり、元彼女の中で一番やっかいな【あの子】。もう、名前すらも聞きたくない。

と言うか。そんなこんなで見とれている間に、野次馬の輪が小さくなって来ている。しかも囲っている女の目がコワイ。

とりあえず、その場を蹴って走り出す。さすがに走り出した男の

進行方向にはこの人たちでも立たない。（私も女だけど…、能力的には男だから良いか。）そのままの勢いで野次馬の向こうの【あの子】に捕まりかけている姫様？　へと進む。

「退きなさい」

叫ぶのではなく、呟く。それでも聞こえるのがこの人たち。ただど慣れてなんて居なさそうな彼女はさすがに聞こえないらしく、いきなり進行方向を開けた【あの子】の様子に驚いて振り返る。

「失礼。」

姫様の腰と膝の下を抱きかかえて走り出す。まあ、俗に言うお姫様だっこ。姫様？だからある意味あつてる思っけれど…

「何すんのよ、変態！」

ですが痛いパンチやキックはどうかと思えますけど…？一発喰らった以降、それを華麗に避けながらパン屋の方向へと走る。

「やあん、レイン様ああ…。」

撃沈したらしく、声が小さくなる野次馬と【あの子】。良かった、追っ手は来ていないらしい。私は建物と建物の間、族に言う路地に入った。

予想外に時間を浪費してしまったと、溜息をつきたくなったが姫様？を抱えている事を思い出した。

「はい、もう大丈夫。」

姫様？をおろすと、彼女は一気に私から距離をとった。…一体、何？　良く見れば胸元を隠している。

路地には日が差さないらしくかなり暗い。更に狭く、奥が深い。中々、人目を避けたい時には良いが…

（嗚呼、そう言うこと…）

暗い路地に連れ込んで一体、何をしようというの！　みたいなことかな…

「大丈夫だよ。姫様（？）、私もあの人達に襲われなくなかっただけだから…」

少し驚いた顔をしたが警戒は解いてくれたようだ。もしも私が危ない狼だったらどうなったんだこの人は。この程度で警戒を解くなんて。

路地の奥の方に積まれている木箱の埃をはたいて、姫様？を誘う。怪訝そうな顔をするがやはり疲れているらしく座る。その直ぐ隣に同じように座ると、深呼吸をして聞いてきた。

「…どうして、助けたの？」

おや、そう来るか。

「…いや、姫様が突っかかっていた野次馬の外側に居た子。」

案外、印象に残っているらしく素早く頷いた。…姫様ってことは否定しないんだ…。少し恐ろしそうにうつむいて、正確に伝える。

「あの子ほかの有名な女たらしのレイファール兄弟ですら恐れている御仁なんだ…」

そうだ、あの人に何度喰われかけたことが…

「実を言つとね。あの人…」

姫様は素直に頷いている。

「男なんだ…」

ふんふん、と素直に頷いて聞いていた姫様？は二回ほど頷いて、目を皿にした。

「……………はあ？」

あまりの驚きに奇声しか出ないらしい。あの人はかなりの美人だ。但し、女だったらのはな…男でもかなり可愛いが。更に続ける。

「男にとって同姓に襲われるのは恐怖なんだよ。あの人も元彼女だけれどね。美形なら見境がない。時折気に入った女も襲うし…、綺麗な瞳で気の強い綺麗な女の人が、好みなんだって。だけど、男の場合美形なら関係なく襲うんだ。女装で近づいて、路地に連れ込んだら身ぐるみを…」

ひい！ 私も襲われた口だ。男装と女装（女装ではないが）、どちらの時でも。

「…なんて…恐ろしい。」

二重奏。見事にハモった。いつの間にか姫様？は背中をさすっている。なんて心優しい方なんだ。何度か深呼吸してココロを落ち着かせる。

「…もう大丈夫だから…」

背中の手をそつと離して、向かい合う。見覚えのある赤い瞳だ。やはりというか、良く心の何処かで感じていた美しい人、幼い日に見た妃様そっくりだ…。

「…きみ、姫様。だよな。」

4：路地裏の交遊

「……………」

「……………」

「…は？」

あつ、やっぱり気付かれていないつもりだったんだ。やはり言うか世間知らずな姫様に思わず笑みを漏らした。

「ちよつと、何笑ってるのよ…！」

…別に、理由なんて…。真偽を確かめる為にそう聞いたのに、隠しているつもりの癖に誤魔化すこともせず（もしくは誤魔化そうとしていたつもり）明らかに驚いたというか『どうしてわかったのかの方は——！』みたいな顔をしていたものだから。

「…その麗しい容姿に、人を惑わせる黒髪。そして——。」

その髪の下に隠れた瞳を見るために姫様の髪に触れる。

「その、気高い真紅の瞳を見たなら。解る人間には解るよ。」

姫様は髪に触れる私の手を振り払うとそっぽを向いてしまった。

（…気高いというより、御転婆かな。）

この様子なら恐らく顔が赤くなっているのを隠したいのだろう。

そつと、覗き込むように顔を向けると開き直ったのか真っ向から顔を向けてきた。

「それに、先程【姫様】と呼んだのだけれど……。気付かなかったようだね？」

慌てて口を塞ぐ姫様。とつくに手遅れなのだけれど何かしたい性質の様だ。その行動が自分が【姫】であると認めているものだとい

う事にも気付いていないけれど…。

ふと、姫様の足元を見る。足首が真っ赤になっていることに気が付いた。きつとこんなにも歩いた事などなかったのだろう。

しゃがみ込み、姫様の足に触れようとした。が、

「なっ、！ 何しようとしているの！」

やっぱり言うのか、姫様が顔を真っ赤に染めて足を抱えてしまった。うん、やっぱり？ まだまだこういう事をするには許しが必要みたいだ。

思わず笑って姫様に弁解する。

「ははっ、そうじゃないから。その足首、捻ったの？ 赤くなってる。」

私が足首を指すとようやく気付いたのか姫様は少し痛そうな顔をした。

「…足、出して…？」

出し渋る姫様を促そうと声をかけると姫様は躊躇いがちに白く艶やかな足を差し出してくれる。

（ガードが甘いのか単純なのか…）

何ともいえないが、兎も角。手ぬぐいを互い違いに破き、即席の包帯が完成ー！ これを交互に撒きつけて、と…。

「そっいえば、どうして城下なんかに来たの？」

包帯を巻き終え姫様を見上げて問いかけた言葉。その言葉に何故か姫様は不安そうに身体を振るわせた。

（…姫様？）

確か今はお触れにあったように舞踏会の準備で忙しいはずだ。会場の準備をするわけではないが、ダンスや礼儀作法をもう一度練習

しておかなければならない。姫様はまだ、……お若いから。

何処か怪しむような不安そうな表情で私を見ていた姫様は少し、誤魔化すように口を開いた。

「…貴方は、『御触れ』の事…。どう思っているの…？ その…
レイファール兄弟って言う最悪の女タラシは舞踏会で私を狙って
るって聞いたけど…」

貴方は？ そうかけられた言葉は別に、戸惑う必要のないものだ
った。だから、特に悩みもせずに返答をする。

「下らない。」

「え…？」

立ち上がり、瞳を覗き込むようにしていった言葉を姫様は瞳を揺
らす事で答えた。

「義兄さ、レイファール兄弟は女性が自分に落ちるまでを楽しみに
女性と付き合うんだ。その理由を聞いた人間は殆どいない。聞か
ないのは『女タラシだから』と決め付けているからだ。確かに私も
つかえひつかえ、女性と付き合うのは賛成しない。それでも、正
確にはあの人たちが楽しんでいるのは、お互いを知ろうとするその
時間。」

ゆつくりと、姫様の隣へ腰を下ろす。何を言いたいのかが解らな
い為、何を言いたいのかを見極めるように私を見つめる姫様の瞳は、
真っ直ぐと美しかった。

「自分を知って欲しいとアピールする姿、レイファール兄弟を知
ろうとするその姿がとても愛しいと、あの人たちは言っていたんだ。
知っているのが当たり前。知らないのがおかしいと言うように完全
に落ちてしまった人には、興味がない。人にとっての『普通』、レ
イファール兄弟にとっての『普通』は、空気みたいなものなんだ。
自分の存在が、無くなってしまったようなものだから、彼らは女性

が落ちるまでを求めるんだ。」

私の言葉の中の何処に答えがあるのかが解らなかったように、姫様は私を未だ見詰めている。

「つまりは、あんな『町中に元彼女が大勢いるというか義妹を除いてほぼ全員がそんな状況を作り出す変態女タラシ兄弟』ですら知っている事を、どうしてしようとしなのか。たった数日の舞踏会で行き当たりバッタリな相手を夫にしまつて、それで良いはずがないだろう。相手を知ってから、結婚へと進むべきだと、私は思う。」

あまりにも長い言葉をほぼ一息で喋ってしまった為に、ついていけないのか。「なが…」という言葉を一ツ零して何も言わなくなってしまった。

「……すまない。もう少し、解りやすく言おうか…？」
少々不安を覚えて声をかけてみるが姫様は首を振っているだけ。

どうしたものかと頬を掻いていると姫様は我慢できなくなったかのように笑い出した。

「あはははっ！ 『結婚は相手を知ってからするべき』って言葉、あんなに長い言葉で言う人始めて見たわっ！ はははっ！！」

予想外の大笑だった。私は恥ずかしくなり、思わず顔を片手で覆う。それでも姫様は顔を上げず、笑っている。ほんの少し、腹がたった。

「ちょっと違う。『愛する事は知ることと同じ』というのも付け足して欲しいね。」

顔を背けて少し素っ気無く言った。言ってから気付いたが予想外に嫌な感じの声が出た。

息が荒くなりながらも笑っていたお姫様は私の言葉の調子の違いに気付いたのか直ぐに笑うのをやめた。そして何処か迷ったように首を伸ばし、私の顔を覗き込もうとする。

「あ、……」

何処か迷っているように口を閉じたり開いたりしては、視線を迷わせる。今までこんな事などなかったから、不安なのだろう。

「……何？」

少しその様子が可愛らしくて暫く遊んでみる。

姫様は包帯の巻いた足首を見詰めながらその足を揺らしている。

「……、え……」

何か言おうとしているが何を言って良いのか解らず、唯言葉にならない声を漏らしているだけだった。

5：初めて抱いた想い

結構の間、沈黙が続いている。元はと言えば、私が笑ってしまったから不機嫌になってしまったようなのだけれど……。

この方も大人気ないと思う。見たところ私よりも少し年上のようにだけど、ちゃんと言う事をまとめられないから長かったんだからそこは笑って返せばよかったんじゃないのかしら？

足を揺らしながらどうすればいいか考える。何時もこんな事になった事なんてないから、どうすれば良いのかわからない。遊び相手の子供達も皆、私が【姫様】だからこんな風に怒ることもなかった。私を姫とわかってこんな扱いをする人なんて……。

微かに、記憶の中を誰かが過ぎった気がした。それは何時かも覚えていない幼い頃の記憶だったと思う。でも、どうしてその人の事を思い出したのだろう。

そんな事を考えている内にどうやら脱線して考えていたと気付き、顔を上げると彼はこちらを見ていた。

気になってこちらを見たといった感じだけれども、全然不機嫌そうじゃない。もしかすると元から怒ってなんか居なかったのかも知れない。それでも、何とも話しかけ難い感じがして、再び俯く。

視界に入っただのは足首。先程、この方が手当してくれただころ。そうしてようやく思い出す。

（この方は、自分に何ら関係ない私も助けてくださったのだ。）

あの馬鹿な方々に囲まれてウンザリしていた様子でしたのに、そんな仲で私も一緒に助けてくれた。その事でお礼も言わずに、質問に答えて貰った上に笑うなんて……。

（とんだ失態ですね。）

兎も角、謝らなければと思い再び顔を上げると直ぐ目の前に彼の顔があつた。何処か心配そうな表情で私の顔を覗きこんでいる。

どうやら気分でも悪いのかと、思っているようだった。

（あ、謝らないと…）

口を開くと言葉にならない声しか出なかった。予想外にこの方の容姿が綺麗だったからだ。

男性らしい精悍な顔立ちの中に、柔らかな女性的な部分もあり中性的な雰囲気でもとても魅力的だ。何よりも、特徴的な腰までの長い赤毛はとてよく手入れされているのかとても美しく、一本一本細やかに肩から流れ落ちている。

私は謝る事も忘れて彼に見惚れていた。今までこんなにも綺麗な人間に出会ったことがなかった。

顔を見詰めて止まってしまった私をおかしく思ったのか一度首をかしげると、暫く考え込む様子を見せてからようやく気付いたように顔を引いた。

「…近かった？」

そう聞く彼の表情は何処か優しくかった。私はその表情に安心感を抱くと同時に謝ろうと思っていた事を思い出し、すぐさま声を出した。

「ごめんなさい！」

あまりにも唐突過ぎたのか彼は驚いている。私は慌てて付け足す。「私を助けた上に、手当てまでしてもらっているのにあんなことしてしまって…」

「ごめんなさい。と言うと、彼は小さく笑い出して。私もからかっていたんだ、こちらこそすまない。と言った。

そして私に手を差し出してきた。その手をとって、木箱の上から降りた私に再び微笑んで手を少しだけ強く握った。

「姫様はもう帰ったほうが良いよ。城下は危ないから。」

そう言っ、手を離してしまいそうだったからもう一度掴んで、彼を引き止めた。何故そんな事をしたのかは解らない。でも、それでも、この方が幻だったように思えて、この手から離れたら消えてしまっ、二度と会えないような気がして――、

私は、唯夢中で彼を引き止めようとした。

「私はディ、本名は長いから愛称よ。貴方は？」

そんな私の想いなど彼は知らずに空いている片方の手で前髪を掻き分けると、暫く考えていった。

「私は父の仕事に付いていったときに何度かお城に入った事があるから、そうだね……ヴィルネール卿に聞いて見れば解ると思うから……」

そう言っ、私の掌からするりとすり抜けて去っ、ていってしまった。

後に残ったのは路地の向こうから聞こえる市場のざわめきと、微かに早くなっ、鼓動。そして、大きな手のわりに細いその手の感触だった。

6：双子のパン屋での【買い物】

路地から出た後、私はパン屋へと向かっていた。そしてふと思った。

姫様をあんな人気のない場所に一人にして良かったのだろうか。

少し不安になったが、振り返って先程出た路地を見ると姫様が駆け足で出てゆくのが見えた。

（…大丈夫なようだね。）

そして、また空を仰ぎ見て思う。

（なんて平和なんだろう…）

市場にはちらほらと先程の元彼女の名残が居るが、市場に居る今の私をわざわざ引き止めるほど彼女達は気がきかないわけではない。ここに居ると言う事は私は買い物に忙しいと解っているのだ。だからこそ、先程のように目の前で止まるような事がなければ実害は全くない。だから買い物時間は私にとって一番平和な時間なのだ。（そういえば、）

あの騒動に巻き込まれる前に買った品物をあの騒ぎの真ん中に置いてきてしまった。

わざわざ戻ってしまうと、アイリーナさんや【あの子】が勘違いして襲ってきてしまいそうだ。暫く考え、とりあえず買い物済ませてから先程の場所に帰るとしよう。

そうして、のんびりと空で鳥が舞うのを見ていた。

「よう、色男。」

パン屋に付いた途端、かけられたのはそんな言葉だった。

灰色のざんばらな頭を整える事はせず、袖の短い服を着た青年。私と年はそんなに変わらないが、いろいろな事で人をからかうことが多いため何処か親父臭い。

「『色男』、てことはさっきの事ですか？」

うんうん。と上機嫌で頷く彼に思い溜息が出る。彼はこの店の店主の一人だ。彼が売り上げの計算をし、もう一人が出費を計算する。何故二人なのかと言うと…

「レイファールに並ぶ大騒ぎだったそうじゃないか。」

そう言ったのは目の前で佇む彼の後ろからひょいと顔を覗かせた同じ顔の青年。表情から髪の色、そして声や喋り方までそこに鏡像が立っているように同じだ。

そう、双子なのだ。双方に違いは殆どない。微かに違うのはその立ち位置だけで、兄は決まって弟よりも後ろに立っているが、他は声も立ち姿も癖も全く同じ、ついでに言うなれば最初に私に話しかけたほうが弟、その後ろから出てきたのが兄である。

「で、なんか騒ぎの原因だったのは綺麗な女の人で。」

「その女を連れて逃げたと。」

この二人も、容姿はそれなりに良いので元彼女達が良くたまつて噂話をしている。そのため元彼女の間の噂話はこの二人の方が詳しい。

どちらにしても、この二人は義兄さん達に次ぐ鬱陶しさなのでさっさと小麦粉を買いたい。

「君達は商売をする気がないのか？」

そう言って、呆れ返ってみると二人は私の首に腕を絡ませる。身長はそんなに変わらない筈だが、どうやらほんの少しだけこいつらの方が高かったようだ。肩にずっしりと二人分の重みが掛かる。

「えゝ？ あるよー、でもさ。」

「色男の逃走劇の方が興味あるよー。ね？ シン・ちゃん♪」

この二人は、私が『^{シンデレラ}灰被り』である事を知っている。知っている

ながら、『色男』と言ったり二人で引つ付いてきたり身体を撫で回したりと義兄さん達以上の事をする。別に触られるのは気にしていないのだから別にいいが…

「わざわざその名前で呼ばないで下さい。」

この街で 灰被り^女状態での私の惨状を知っておきながら灰被り（女の方）の愛称を呼ぶのはどう考えてもからかっている。

何するにしても、この二人が知りたいのは事実である事を私は知っている。この二人の鬱陶しさをなくすのは二人が知りたいと思っている事実と、つまらない現実だ。

「…実を言いますと…」

「うんうん」

「なになに」

二人がより一層、顔を近づける。背中から首元に二人で抱きついてきているのだが、大きな身体を器用に動かしてお互いに邪魔にならないように工夫している。私は解りやすく要点だけ述べた。

「元彼女の中に居たのは抜け出していた姫様で、困っていたようなので助け出してからこちらに小麦^{マル}を買いに来ました。○！」

……………何故か何時も喧しい二人の間に沈黙が走る。鬱陶しい上に喧しいはずの二人があまりにも大人く静かに私の首に抱きついてるので反って怖くなってきた。左右にある二人の顔を見ると、少々困った顔をしている。

「……………え？」

「……………もう一回、いい？」

どうやら信じられないようだ。私が女の人を助けていることは時々あり、そして助けたはずの女の人に襲われかける事も良くある事だった。でも、その助けた相手が姫様で更には何もなく今此処に小麦粉を買いに来ていると言うことがとても驚きらしい。

「助けた相手が抜け出した姫様でした。」

「…うん。」

「そして此処に小麦粉を買いに来ました。」

「…ちよつと待つて。」

何故か止められた。何かおかしいことでも言っただろうか。両側の二人の顔は左右が違っただけで片方を見ればもう片方を見る必要がない。

「そこは助けたお礼を目当てにお城に送り届ける——、じゃない？」

「それに、何か肝心な事抜けてない？」

どうやらとても気になることがあるらしい。でも、『お礼を目当てに』？

「…姫様は、この時期抜け出せないはずだから送り届けても何も無いですよ。」

そう、舞踏会がある場合。ダンスなどのお浚いをして、舞踏会の段取りに沿った流れを何度も確認しなければならない。これらは中々抜け出せないはずなのに姫様は上手く抜け出していた。恐らくそんな姫様を送り届けたら、姫様に監視をつける話が出て色々大変だろう。お礼どころか、折角助けた姫様に迷惑だ。

「いやあ、つまり逃げた後ほとぼりを冷ましてから置いてきたと？」
（嗚呼、そういうことでしたか。）

「ええ、並んで歩いていると再び姫様が絡まれる可能性がありますから。」

その可能性も考慮して、一人にしてきたのだ。だが、思ったよりも遅い姫様だ。さすが、現国王でもある。

この国では、女性が王になる。そのため、その王は古い呼び名そ

のままに『姫』と呼んでいる。今の姫様は政治にとっても優秀だとか。

「……ああ」

「……そういうことか。」

何時の間にか二人は納得したような言葉を残してさっさと首から離れていた。そして兄の方は店の中の秤を表に運び、弟の方は小麦粉の袋を探している。

「忘れておいてきましたー。みたいな事を期待してたのに……」

「案外つまらないね。」

何故か少々失礼に値する事を言いながら、二人は私の前に秤と小麦粉の大袋を持ってくると改めて向き直る。

「さて、【小麦粉】だね。」

「どれだけ？」

五本の指を立てて【五百グラム】と表現すると直ぐにさじで小麦粉をすくい、細かく量りだす。そして、何でもない様子で呟く。

「……そういえば、初めてストーカーちゃんが【ナイリー二家】の次期当主って知りました。」

それに細かく分量を量っていた弟が、量りながら直ぐに返事を返す。

「嗚呼、あの市場のめばしいとこ全部仕切ってる家かー。あそこって生産した物を市場に出す際に税金をかけてるんだよね。」

腰が痛くなつたと兄にさじを渡し、柔軟運動をすると私に向きなおる。その表情は何処か不敵でそして意味深な笑みを浮べていた。

「だからその分値上がりするんだよ。知ってる？ この辺の市場やウチみたいな店のある土地は、全部ナイリー二家の土地で毎月貸し賃を払わなくちゃいけないから、更に品物の値が上がってるって。」

唯の世間話。でも、これらの話は全て特別な情報でもある。店のほうが知っていて当たり前の情報は消費者に対してはあまり知られていない。更にコレには貴族間でしか知られない商業関係の情報も含まれていることが多い。

【小麦粉】とは情報の事で、世間話に興じるふりをして中々聞けないような商業関係の情報を聞く。そして情報に比例して買った小麦粉の値が上がる。だが、情報は中々買えるわけではない。二人の信頼を得なければ成らないのだ。

「嗚呼、それは聞いたことがあります。あらゆるところに手を回して市場を支配しようとしていると。」

弟はあくまで世間話をしているように陽気な様子を振舞う。だが、その表情には何処か怪しげな部分が滲み出ている。

「うん。そうなんだけど、実質支配してるようなものだよ。他の市場に關っている貴族はナイリー二家の息が掛かってるし、一部そうでないのはナイリー二家の権力に屈してるから……。」

まだ税金は上がりそうな感じだから、こっちは商売上がったりと愚痴を漏らす弟は、兄に紙袋を持ってくるように言った。そしてこちらを見詰める。

コレは合図だ。小麦粉を量り終えるまでに情報を売るが、量り終えた後はまだ買うかを確かめる為に二人のどちらかが小麦粉を持ち帰るための紙袋を取ってくるように頼む。この時、会計の話をすれば情報は買わない。反対に会話を促せばまだ情報を買うといった合図になる。

中々に高い買い物になるがこの二人は商売に係る情報。税金、貴族、貿易、更には個人の情報の一部まで、確かな情報を買ってくれる。

「……その私利私欲に塗れた精神が次期当主にまでに伝染していそうですね……。」

重い溜息を吐く。演技でもなんでもなく、本気で気が重くなる。

「でも、シンちゃんならうまく使えるでしょ。」

兄が持ってきた紙袋を受け取り、量り取った小麦粉を弟がつめて

ゆく。弟に代わって兄が話を進める。

「それよりも、もつといい朗報だよ。今の姫様が、どうやら近隣国と交流を深めて新たに貿易をするらしい。」

弟と兄の情報はそれぞれ価値が違う。弟は安価で耳寄りの情報を、兄は高価で扱う人間によって価値の違う情報を買ってくれる。何時も思っているのはこの二人から情報を買う場合、二人の見分けをつけておかないと困ると言う事だ。気に入らない相手には確かに情報は売るのが、耳寄りな安価な情報と高価で扱いの難しい情報をごちゃ混ぜにして話してしまうのだ。

私は、感心した表情を浮べる。それに答えるように兄は話し始める。

「この国は大国で大体は地産地消出来ているけど、価格が高いと言う事が姫様の耳に入って、質のいい大量生産の出来ている国のものを輸入しようとしてるんだ。都合よくこの国の近隣国にはそんな国が多いからね。その国の方もこの大国には仲良くして置きたいと思っているから話が進んでいるんだ。」

唯一の商人であるはずのパン屋の店主が、何故かまだ公になっていない国の政治に詳しいのは事には誰も突っ込んではいけない事になっている。私も彼の情報網には首を突っ込みたくはない。彼らはこの国で一番敵にまわしてはいけない人間だろう。

「では、ナイリー二家の現当主は堪ったものではないでしょうね。」
「うん、そうだね。何せ市場を独占していたんだから。貿易されたら利益が大幅になくなっちゃうね。姫様の方も独占しているのに気付いてこの貿易に手を出したんじゃないのかな？ もとより大した貿易はしていないから他国との交流も中々な無いしね。独占を直接止めさせるよりも別のやり方で切り崩そうとしたんでしょ。」

…先程であつた姫様はまだ、それほどこのことが出来とは思えな

い。思春期に入りかけた少女のようなそんな雰囲気を纏っていた。

（それとも…）

それすらも姫様の演技だったとも言うのだろうか。喧嘩の後の仲直りのやり方すらも知らない未熟で無邪気な少女を演じて…。

『この娘、先程から店のものを骨抜きにして回りましたの。』

アイリーナは、確かこういった。もしかすると城下へ来たのだった。舞踏会に関して様子を見るためではなく、市場の様子や噂を聞きだそうとしていたのかもしれない。疑えばきりが無く、また答えも一向に出ない。

（……私は…）

私が見た少女を信じよう。

もしかすると、仕事中は性格が変わるといったよくあるようなことなのかもしれない。

私何か悩んでいるのに気が付いた兄は、大きく咳払いをして私に気を向かせた。そして真っ向から見ているのに満足すると更に続けた。

「そして、もしかすると悪い情報。」

そう切り出した兄の後ろでは、弟が袋詰めが終わった小麦粉を携えてこちらを見ている。そしてもう一度確かめるように私を見る。

「焦らさないでくれ。」

はいはい。とまた調子よく返事をする。

「最近、小型の道具が東の国の方から山を流れる川を使って輸入されてるでしょ？ その中にナイリー二家現当主が輸入したものがあつただけど、やけに中身を隠したがつたらしくて船頭を勤めてた方が中身を聞いてみれば、『姫様に捧げるものです。』とだけ答えたそうなんだ。」

そこまで聞いて私は首をかしげる。それだけでは何の価値も無い。いや、中身によっては強請る事が出来るが、その肝心の中身が解ら

ないのであれば意味が無い。

「…【幾らになる。】」

「今回は【高い】よー？」

弟は勘定台に構えている。…それほどのか。

「【買った。】」

「毎度あり。」

弟は小麦代と、情報代を小さな紙に書きとめ兄はそれを見てから話し出す。

「運び下ろす際に蓋の打ち付けが甘かったらしくて微かに開いたんだ。そして、ちらりと見えたのは東で最近開発された小型の銃。男の拳二つ分で、かなり軽いけど命中精度は抜群と評判のもの。一瞬だったけど、そいつは記憶力がいいらしく正確に話してくれたよ。」

「…拳…、小さいな。」

「うん、タキシードにも潜ませる事が出来そうだね。」

そう、思わせぶりの言葉を聞き流しながら私は会計を済ませ、周りの元彼女の目を誤魔化す為に世間話に興じていた。

7：心の痛みと垣間見た本質

家に帰ったのは日が半分ほど沈んでからだった。

街は紅く、昼ごろから張り込んでいた元彼女たちも家へと帰っている。そんな中、私は玄関で待ち構えていたアル義兄さんを引き連れてキッチンに入った。

「シンデレラ。街のハイエナが、「レイン・ライナー様へ」って…これ、シンデレラの買い物だろ？」

キッチンに入って小麦粉を棚に収めた後、野菜と肉を取りに戻るのを忘れてしまったと落胆している時にアル義兄さんがさし出したのは正しく始めに買っていた品物たち。嗚呼、激安の肉におまけの多い野菜たちよ。

どうやら氣を使った元彼女が届けてくれたらしい。

（それにしても…）

どうしてアル義兄さんの言葉には句点が多いのだろう…？ 普通に続けてしまえばいいのに一々区切るから元彼女も会話しがたかったらしい。

そんなどうでもいい事を考えながら、アル義兄さんに今日買ってきたものを片付けるように言って部屋へ服を着替えに行った。

私の部屋は屋根裏部屋だ。でもそんなに悪いものではない。掃除は完璧なのでかなり清潔で、更には屋根裏と言う事は普通の部屋よりも面積は広い。窓は天井の一部と側面に一つずつあるため日当たり良好。更には太陽や月の光だけで十分明るいのでわざわざランプなどをつける必要が無い。

（昔から此処が私の部屋でしたしね…）

父から与えられたこの部屋には少々秘密が多い。備え付けのクロ

ーゼットには秘密の引き出しがあつて父の趣味の【おもちゃ】が綺麗に並んでいる。

私の服も父が成長に合わせて前もって作って置いておいたものだ。今着ている服は私が幼い時に計算して作つたらしく多少小さいところがあるが問題なく着れている。

…初めて私が男装をしたのは、父の仕事についていった時だった。父の仕事はとても凄い仕事らしく城に堂々と入り、更には当時、今は先代である姫様と直接話をしていた。その時にために叩き込まれた礼儀作法は全て男がするものだったが、初めて知ったのはその時だった。

それから何度も仕事を付き添った。その度に目にすることが出来る姫様はとても美しく、言い表せないほどの感情を私に抱かせた。

そしてその時、私は【姫】が継ぐ国王の証である【瞳】を知った。父は、その瞳にも詳しくその瞳の能力が効かなかった。

「…どうして、置いていったの…？」

もとより、変わった人だった。私に変態プレイを要求しその度に母さんにとび蹴りを食らわされていた。結局は変態じみた事を私にさせた。でも、それでも父さんはそれを理由に出て行くような人じゃない。変態な父さんは確かに変態で失踪してもおかしくは無いけれど、でも父さんは確かに誠実で優しい人だった。

私と、母さんを愛してくれていたのに……。

「父さん…、どうして？」

着替えを抱きしえたまま、クローゼットの秘密の引き出しを見詰める。先程あけたままで怪しい【おもちゃ】が見えている。そして

それが反って父さんを思い出し、涙が込み上げてくる。

唯只無心でそれを見詰めているうちに、奇妙な事に気が付いた。

綺麗に納められた【おもちゃ】の間の空間。その一箇所が完全な正方形を作っている。

（まさか…）

そこを指でなぞる。中身を傷つけないように張ってある布の下に、その正方形の型に沿って何かがあった。

私はその布を破り、確かめる。そこには革張りの小箱があった。

開けてみるとメッセージカードと小さな小さな……、

バキッ！

「「痛っ！！！」」

盛大に扉の壊れる音がして、部屋に何故か灰髪と金髪の男二人が絡み合ってただれ込んだ。

お互いにお互いを抱きしめて部屋の床に倒れこんでいる。明らかに、この状態で扉の外で立っていたようだ。

「……」

「「……………」」

二人は下からこちらを見ている。そして、何処か気まずそうにしている。別に、私自身は着替える前だったので男装したまま、着替えを抱えている格好だ。

「……」

「「……」」

「…人の部屋の前で逢引ですか？」

「…あ、」

「違う、けど、近い。」

お互いにようやく出た言葉がそれだった。だって、人の部屋の前で抱き合ってたらこの二人ならその線を疑うべきだろう。フェア義兄さんは何を言って良いのか解らなかったように口を開けたりして困っている。

「じゃあ何です？」

そんなフェア義兄さんを放っておいてアル義兄さんに話しかける。アル義兄さんは戸惑うフェア義兄さんを見て、口を開いた。

「シンデレラが、帰って来たのを知った兄さんが、「じゃあ着替えを覗こう！」なんて言ったので、止めているうちに、扉が。」

「いや！　まて、アルだって一枚ずつ外される服がまた魅力的だと思う」なんて珍しく饒舌でノリノリだったじゃないか！」

……結局。

「覗きにきたというわけですかあ？」

込み上げかけた涙さえ奥のほうから吹き飛んだ。扉の前でどちらが覗くかで争って組み合っているうちに扉が壊れたと言うわけらしい。

本当に、下らない。

拳を握り締めて肩まで振り上げた後、二人のその綺麗な顔のど真中に全力で振り下ろそうとした時、フェア義兄さんが手を突き出し、制止した。

「ま、まって、シンデレラちゃん！　扉の前に付いた時にはもう覗く気なんて無かったんだよ！」

珍しいその言葉に、私は動きを止める。どういうことかと、向き直って二人を見据えるとアル義兄さんがフェア義兄さんの額をひっぱたいてる。

「こんな時はあえて鉄拳を受けて誤魔化すところだろう。何でそこ言うんだ。」

饒舌。本当に珍しい。どうやら二人には覗こうとした事実以外に

もう一つ誤魔化したかった事があつたようだ。私は首をかしげる。

「…何？ それって。」

しゃがみ込んで、乱れたアル義兄さんの前髪を掻き分ける。少し迷つたように目線を泳がせるがまだ抱き合つたままなので逃げる事も出来ない。

そして観念したように溜息をつきアル義兄さんが私を仰ぎ見る。

「泣いてただろ？ シンデレラ。」

予想だにしない言葉に私は息を詰まらせた。私は決して泣いて何が無かつた、泣きかけてはいたが決して泣いてはいなかつた。だが、アル義兄さんは迷いも何も無く私に泣いていたと言う。いつものふざけた様子は何処にも無い。

「お父さんの事を思い出して、泣いてただろ。」

「え…、」

「そんな事無い」そう言いたかつたのに、それすらも言葉に出来なかつた。フェア義兄さんのほうは、心配そうな顔で私を見ている。

「シンデレラちゃん。シンデレラちゃんは、お父さんが好きだつたんでしょ？ どうして、何時も隠そうとするの？」

変態、馬鹿、そんな言葉ばかり居ない父に向かつていつていた。

そうでもない、答えの無い疑問と寂しさに押しつぶされてしまひそうだった。父さんは確かに立派な人だった。

「あの義母さんの様子を見れば直ぐに解る。愛してなかつたら嗚呼は成らないし、諦めていてもあんなに絶望しなかつた。…解るんだよ、シンデレラ。」

母さんはあんな父さんでも愛していた。父さんの変態ツぷりは冗談でもあつたし、父さんの本当の趣味でもあつた。だからこそ、母さんとはび蹴りを父さんに食らわせたし、何度そんな事をしても微笑っていた。でも、いきなり居なくなつて、残した言葉が『もう、

ロマンは人には理解されない！』なんて、ふざけた内容だった。もう少しだけでも、理由を言ってくれば良かったのに。

「別に、僕たちには弱いところを見せていいんだよ。どうせ馬鹿だから直ぐに忘れちゃうんだから。」

そつと、二人で私の頭を撫でる。その姿は普段の二人とはまるで違っていて、世話の焼ける馬鹿な義兄さんではなかった。妹を心配してる本当の兄のようで、何故かとても泣きそうになった。

「……どうして義兄さんたちは本当の恋人を作らないのかなあ……」
何故か不思議でならなかった。こんなにも優しく人を思うことが出来るのに二人はちゃんと女の人と付き合わない。それがとても残念でもあるし、とても嬉しくもあった。

元恋人と一緒に居る時は絶対に見せない優しい二人を、私が独り占めしているということが、とても。

「……なんだろ、シンデレラみたいにウザがられそうだから？」

「何か、皆紳士的な僕たちのほうを好きみたいだから……」

兄さんたちはようやく起き上がりながら、そう言った。

真実、この二人は外面が紳士的で、それに惚れ込んで居る人が多い。でも、こんな間抜けな二人が一時もボ口を出さないわけが無い。

「知ってる？ この手袋を作った職人姉妹。気が強いけど結構優しいって。」

恐らくこの二人は商人の二人には手を出していないだろう。若くしてひとり立ちした仕立て屋の姉妹。二人は気が強く、ほぼ仕事一筋なところがあって口説きに言った兄さんたちを店からたたき出したことがある。

「……あまり話したことが無い。」

何処か考え込むアル義兄さんに、泣きつくようにフェア義兄さん

がいった。

「だってシンデレラちゃんのプレゼント頼む時だって、すんごく素っ気無かったから……」

二人はとても腕がよく、私の手袋や兄さんたちの服は皆彼女達が作っていた。

とても笑えて来た。二人が見破れなかった彼女達の「本当」を私が知っているのが誇らしく、楽しかったのだ。

「二人は『女タラシ』でだらしない人が嫌いなだけだよ。私にするように、気楽に話しかけて見ればいい。きっと、きつく言いながらも優しくしてくれるから。」

そう、二人は義兄さん達が好きだ。でも、【女タラシ】と言う事実が彼女達を正直にさせなかったのだ。直ぐ側で笑って会話すると言うそんな事すらも出来なかった。

きっと、二人の本性を知れば彼女達は世話を焼かずには居られないだろう。例え照れくさくとも、世話焼きな性格が自然に表に出てそれに反感を持った元彼女すらも跳ね返す気の強さを発揮する。そんな未来を想像してしまった。

(…きっと、仲の良い恋人に慣れると思うのに…)

義兄さんたちは首を傾げて本気で悩んでいる。大方そんなところ、見逃すはずが無いと思っているのだろう。

その様子が更におかしく思えて、少し落ち込みかけていた感情がまた上へと上がる。

(まあ、いいか。)

もう、義兄さん達は存分に悩んでしまえ。私が苦勞した分、このことで真剣に悩んで見れば良い。

私はいつもの調子に戻った事を自覚し、未だ悩む二人を部屋から

押し出す。

「と言うわけで出てってください。」

何処か不満そうな声を出す、この調子で覗かれても嬉しくない。私は二人を部屋から出すと、扉につつかえ棒をして更に布を張った。

「コレじゃ見えないじゃん。」

「…残念。」

二人もすっかり元に戻っている。もう少しばかり悩んだまま大人しくして欲しかったのだが…。

「当たり前です。」

さつさとフェア義兄さんに借りた服を脱いでベッドに置いて、抱えていた服を着る。

少し茶色身の帯びた紅いドレス。決して豪勢とはいえないが地味ながらも質のよい生地を使用しており、背中一列に磨きボタン。決して活動の邪魔はせず、更にはエプロンはこのドレス専用のきつちりとフィットしたもの。

父さんの計算はほぼ完璧だった。唯誤算は予想以上に伸びた身長と付いた筋肉だった。胸元は少々余裕がある。もとよりその程度で設計されていたようだが、微妙に余っていると少し邪魔だ。髪の毛を肩にかけ、ボタンを一つずつ留める。

このボタンは父さんのこだわりだった。変態癖が発動し、留め難いボタンにしたのだ。その為幼い私は何時も父さんにボタンを止めてもらった。でも、父さんが居なくなる暫く前から自分で留められるようになっていた。コツは居るが案外できるものだ。

「よし。」

エプロンのリボンを結び、髪の毛を束ねていた結び紐を変える。銀で作られた髪留め、よく伸びるので髪の毛を一つに束ねる事が出来る。コレもまた、父さんのプレゼントだった。

私はフェア義兄さんの服を丁寧に畳むとそれを抱えて扉を開ける。

ドサッ、

「……」

やはりと言うのか、扉を開けると中の音を聞き取ろうと扉に耳を当てていた二人が倒れこんできた。

「……」

「……てへ。」

何が「てへ。」だ。などと思いながらフェア義兄さんの胸に服を乗せ、義兄さん達に笑顔を向ける。それが意外だったのか驚いたような顔を見せるが。

ガスッ！

フェア義兄さんの額を思いっきり蹴り飛ばす。仲良く横に並んでいたのでフェア義兄さんの額を蹴ればその後ろに顔のあるアル義兄さんの顔面にフェア義兄さんの後頭部がぶつかる事になる。

「扉、明日のうちに直してくださいね。」

暫く痛みのにた打ち回った二人を飛び越えて、二階の母さんの部屋を覗く。

誰かが気を利かせてランプをつけておいたのだろう。部屋からはランプの暖かな明かりが漏れる。外は藍色と紅の入り混じり、暗くなっている。

机とクローゼット、それとベッドだけの部屋。机には私が用意した湯の張った洗面器と日記、そしてランプしかない上に、クローゼットには殆ど中身が入っていない。外に出る気の無い母さんにはもう、服は殆ど必要ない。…父さんが母さんに買ったドレスは全て母さんが暖炉にくべてしまった。

私は燃え残った灰を掻き集め、瓶の中に詰め込んだ。そして今でも私の机の中にその瓶はある。灰を母さんの前で掻き集めて暖炉に

身体を入れ、灰塗れになった私を母さんは【灰被り（シンデレラ）】と呼んだ。

それ以降、私は【灰被り^{シンデレラ}】と呼ばれている。義兄さんは、唯私が本名を呼ばれるのを嫌がるから私を【灰被り】と呼んでいるのだ。

母さんはまだベッドで寝ている。昼ごろからずっとそのままだったらしい。私は静かに扉を閉めようとした。

「……誰？」

だが、まだ微かな隙間が残った状態で母さんが目を覚ました。扉を開けたとき既に目が覚めていたのだろうか、私の顔は認識できなかったらしい。

私は久しぶりに聞いた静かな母さんの言葉に緊張した。何時もヒステリックな声しか私にはかけなかった。だからこそ、この声は本当に何年ぶりでどう答えて良いのか解らない。

「……」

沈黙が走る。母さんが扉を見ているのが解る。…このまま扉を閉めてしまえばいいのだが、この扉を閉めれば何故か不味いと思った。扉の微かな隙間からは部屋の細い明かりが漏れている。それが手にかかっていて下手に動く事が出来ず、ただそつとドアノブを撫でる。

「…ルイ…？」

手が微かに震えた。その名前は…、もう何年も聞いていなかった。

「ルイなの？　今まで何処に居たの？　心配したじゃない。」

（嗚呼…）

【母さん】だ。

決して、【奥様】や【紅の姫君】でもない。本当の、母さんだ。

「まさか貴方までレインみたいに居なくなるんじゃないかと思って心配したじゃない。」

ルイ、レイン、それは私の名前でもあるし父の名前でもある。

ルイは私の本名、父さんと母さんが与えてくれた大切な名前。レインは私の偽名で、…父さんの名前だった。

「ねえ、ルイ。こっちにいらっしやい。顔を見せて欲しいわ。」

…出て行くわけにはいけない。私は、父さんにそっくりなのだ。きつと此処で顔を出せば母さんは私を父さんと思って、またいつもの調子で叫びだす。

それは衰弱した母さんの身体にも悪く、また、私が泣き崩れてしまう。

こんな時ぐらい、自分の事を考えないことはないのだろうか。あまりにも愚かしくて笑えてしまう。結局は今出て行くのが怖いのは私が母さんに嫌われるのが怖いからなのだ。ヒステリックに叫ばれ、物を投げつけられるのが…。

「…来てくれないの？ ルイ。あなたもレインみたいに、置いていくの…？」

今にも泣き崩れそうな声に、胸が痛んだ。どうすれば良いのかわからない。顔見せて欲しいという、母さん。でも私の顔は父さんとの違いが無くて、唯一違うのは髪の色だけ。

何から何まで父さんに似ているから母さんは私を父さんと思う。

（それなら、）

8：優しいぬくもり

それならと、私は壁の角に顔をぶつけた。

もとより鋭かった角に顔の肉が切れた。痛みに思わず手を傷口に持つて逝く。生暖かい血が額から頬にかけて溢れ出している。傷を押さえているほうと逆の手で髪を束ねていた髪留めを外し、長い赤毛を広げる。

傷を押える左手に血が伝い落ちる。

私は扉を開けた。

「まあまあ、どうしたの？ ルイ！」

母さんは顔から血を流す私を心配し、ベッドの上から手を伸ばす。もはや気遣うように手を伸ばされた記憶は擦れてしまっていた為、少し戸惑ったが、それでも側に寄るように呼ぶ母さんにそっと近づいた。

私の顔を両手でそっと包み込むその手に、思わず体が振るえた。それに気付いた母さんは優しく微笑んだ。

「大丈夫。食べたりしないから。」

身をそっと屈め、手を避けてと言う母さんに従った。

手を避けると、母さんはまあまあと言って頭の横にある机の洗面器につけてあった手ぬぐいを絞る。

「あ、私がやります。」

すると母さんは少し怒ったように眉間に皺を寄せた。

「けが人は座っていなさい。それに、敬語を使わなくていいの。まるでレインみたいじゃない。」

ベッドの脇に座らされた私は思わず口を押えた。父さんみたいだ

と言われたことに慌てたのだ。その様子に母さんは微笑う。

…もう、こんな事何年も無かったから戸惑ってしまう。母さんはまるで父さんが居なくなる前の母さんだ。絞った手ぬぐいを手に持って、もう一方の手で私の頬をそっと掴む。

「ちよつと痛いかもねー。」

そう言って、顔を流れる血を拭う。どうやらランプをつけた人が湯を継ぎ足したらしく手ぬぐいは温かった。

傷には触れず、その周りの血をふき取っては手ぬぐいを絞る。何時の間にか洗面器の中は真っ赤になってしまったがそれでも母さんは私の顔を拭っている。

「痛っ、」

軽く傷に触れた手ぬぐいが予想以上に痛かった。どうやらかなり傷は深いようだ。

その声に母さんは慌てた。

「ごめん、ルイ。痛かった？」

「いえ、ちよつと触れただけで、…だから。」

慌てて弁解するが母さんはごめんなさいと謝罪する。

「ちよつとでも痛かったでしょ？ 別にいいのよ、痛がっても。」
本当に悲しそうな顔で更に慎重に手ぬぐいを当ててゆく。

（…怪我なんてしなければ良かった。）

とても悲しそうな顔をしている母さんなんて、見たくなかった。
（やっぱり）

私は私自身が怖かったからこんな事をしたのだ。母さんが子供の怪我をどんなに心配するかなんて、考えていなかった。

母さんは手ぬぐいをもう一度絞ると、今度は私にそれで傷口を押えるように言った。

「…あ、」

「なあに？」

それとなく出た声が母さんの気を引く、それだけで嬉しかった。

「有り難う。」

そういうと、母さんは微笑んで私を抱きしめた。

ふわりと優しい香りがして、サラリと落ちる髪の毛がとても綺麗だった。身体に触れる母さんの腕はとても細く、とても柔らかい。なのに、私を力強く抱きしめている。

「大きくなった。母さんの若い頃にそっくり。」

そう言つて、私の髪を手櫛で梳くのがとても心地よかった。

「母さんは、今でも若くて綺麗だよ……」

「あら、うれしい。でも顔に傷なんて作っちゃ駄目よ。お嫁の貰い手がなくなっちゃう。」

冗談じみた様子でそう言つた母さんは、自分の胸元に私の顔を寄せた。

「ちょッ、」

大きな胸に顔が押え付けられ窒息しそうになる。必死に身体を動かし、何とか顔の向きを変える事に成功した。

「服が汚れる！ 母さん！」

取り乱す私に遠慮無く母さんはふふふっ、と血の流れる顔を胸に付ける。

「服は洗えばいいの！ それより好きな人とか居ないの？ 正直に言いなさい！」

窒息は免れたので逃げ出そうとしていたが意外に母さんの力は強く到底抜け出せそうに無いので、再度手ぬぐいで傷口を押さえ母さんを見る。

母さんは楽しそうに笑つて私を見つめている。

「……気になる人なら……」

「そう、いいわね。誰かしら？ パン屋のレイとライ？ それともレイファール兄弟？」

どうやら母さんは自分が再婚した事を覚えていないらしい。義兄さん達は昔から評判だった。母さんは恐らく私の年と近い人の名前を出しているのだらう。久しぶりにパン屋の双子の名前を聞いた。

「どうして二択で二人組なのさ？」

少し呆れたように言ってみる。すると母さんはやはり楽しそうに微笑んで答えた。

「ふふっ、若いうちはその位の甲斐性は必要よ。」

そんな甲斐性は要らないと思う。でも、何故か母さんはずっと楽しそうにしている。そんな母さんの顔を見てると自然に口から言葉が零れていた。

「…ねえ」

「ん？ どうしたの？」

「母さんは…どんな恋をしたの？」 …何時も、こんな話をする相手なんて居なかった。義兄さん達は恋なんてものをしたことが無いと思っていたから。二人はきつと遊びのつもりだから、きつと本当の恋をすれば戸惑うのだろう。何時も何時も興味はあったが心の奥で封印していた思いだった。

母さんは窓の外でもう微かにしか見えない夕日の色を見据え、静かに言った。

「…お母さんは、高貴な貴族の娘なの…。」

「うん…」

「だから舞踏会の招待はそれはもう、溢れかえるほど来たわ！」

「…全部行ったの？」

「ええ、重なっているもの以外ぜんぶ。」

「だからいろんな人と出会って、色んな恋をしたの。」

「どんな？」

「色々。同じ貴族のお坊ちゃんとか、お金以外のとりえがなくてね。つまらなかった。でも可愛いところがあつたのよ。」

「次はお医者さん。とても体のことに詳しくて熱い夜を過ごしたわ。」

「……」

「少し刺激が大きいかしら？ でも仕事しか考えてなかった。他にも商人やその息子、娼婦館で働く青年とか一度騎士とも恋をしたわね。」

「その人は？」

「とても誠実だったわ…、でも彼は戦場に出たの。」

「…英雄死…？」

「そう、でも私は絶望した。どうして人が死んでその死を喜ぶ事が出来るのかって、とても苦しくなった。」

「そんな時にレインとであつたの。」

「…父さんと？」

「そう、気晴らしに出席したお城の舞踏会で国王の補佐官だった彼と。」

「補佐官だったの?!」

「ええ、知らなかったの?」

「全然。」

初めて知った、父さんは補佐官だった。だからお城に出入りが出来て直接姫様と話すことが出来たんだ…。

「ライナー家は代々補佐官なのよ。それで、壁の花になっていた私をダンスに誘ったの。礼儀作法も完璧で思わず見惚れたわ。」

「母さんは踊ったの?」

「ええ、何時間も舞踏会が終わりに近づくまで…。踊り終えた後何も言わずとも、思っていることは同じだった見たいでね、一緒にバルコニーに出たの。」

「じゃあ、もしかしていろいろな話を…?」

「そう、恋人が戦場で死んだ事もそれを喜ぶ世界が怖く思ったことも…とても臆病だった事もね。そしたら、あの人なんていったと思う…?」

夢見るように、私の顔を見詰める母さんを私は眺め口を開いた。

「臆病なのは私が傍に居なかったからでは？」

何度もこの台詞は父さんから聞いた。父さんは踊った時に母さんに惚れてしまっと思って思わずそう言ったと照れくさそうに笑っていた。

「そうよ。その大胆な言葉にお母さん、思わずコロツといっちゃって。一緒になったの。」

「電撃結婚、てモノ？」

「いいえ、恋愛結婚かしら。結婚した後いろいろ知ったけどあんな変態だとは思わなかったわ。」

そう言いながらも母さんは嬉しそうに笑う。本当に、母さんは父さんが好きなんだ。

「でも幸せだった。レインと暮らせて、一緒にいられて。恋が出来て……」

母さんが私を抱えていた腕の力を緩める。私はそっと、その手を外して母さんと向き直る。

母さんは今にも寝てしまいそうに瞼を閉じかけている。それでも最後、コレだけは伝えたいというように手を伸ばして私の頬に触れる。

「ルイが、生まれて幸せだった……。幸せだったのよ……。本当に——、大きくなっただわね、ルイ。……」

瞼を閉じる瞬間、微かに母さんは微笑んだ。そして微かな寝息を立てて、眠り始めた。

……とても満ち足りた思いで、私は溜息をついた。そして、傷を押さえていた手ぬぐいを洗面器に入れてから母さんの服を着替えさせた。

私の血の付いた服と洗面器を持って扉へと歩く。部屋には母さんの寝息と私の歩く音、そして微かなランプの燃える音が聞こえてい

た。

9：傷の及ぼす影響

夕食の準備をしようと一階へ降りると……何か焦げ臭い匂いがしていた。

（嫌な予感……）

そしてキッチンに着くと案の定、義兄さん達が大騒ぎしていた。

「アル！　なんで卵に胡椒を混ぜ込んでるんだ！」

アル義兄さんは器に割った卵を溶きながら、そこに少しだけ胡椒を入れている。

「……味付け。」

「卵は要らないだろ！　何を作るつもりだ！」

「東の国の「玉子焼き」とやら。」

確かに東の方には胡椒を少し加えて何層にも巻いて焼く「玉子焼き」とやらがある。作り方も簡単でこの前パン屋の二人から貰ったレシピをアル義兄さんが密かに読んでいた。

「東の国か！　それなら僕は「野菜炒め」を作っているんだ！　アルより速いぞ！」

一方フェア義兄さんは【野菜炒め】と称してぶつ切り（に切ったであろう跡のある）のピーマンや人参を必死に炒めている。だが、その刻んだ跡に林檎の皮や小麦粉の袋があるのはどうしてだろう？

「……どうして小麦粉と林檎も入っている？」

入っているらしい。野菜炒めにその二つは要らないだろう。その上、空になった調味料の瓶がその辺に転がっている。

「何言ってるんだ？　林檎と小麦粉も野菜だろう？」

……惨状はわかった。めばしい野菜と思われるものを炒めているようだ。その上、隣のアル義兄さんが顔を顰めている事から転がっている空の調味料は全てその中に投入されているらしい。先程か

ら臭って来る臭いはフェア義兄さんの持つフライパンの中からのようだ。

「……義兄さん。何を作っているんですか？」

フライパンと格闘するフェア義兄さんは私の声を聞いてこちらを向くが、その肩越しに真っ黒になった野菜などと思わしき物体がフライパンの上で灰になり掛けていた。

「義兄さん！！ 火を留めてフライパンを下ろしてください！ フライパンすらも駄目にするつもりですか！！！」

「そんな事より！ シンデレラちゃん！！その傷どうしたの！！ 何したの！ 母さん？ また母さんのの？」

まだ血が少し流れる傷の存在すらこのキッチンの惨状を目の当たりにしてしまえば、忘れてしまいうだろう。私は確かに傷の存在を忘れていた。心配する義兄さんを見て傷を思い出したのだが、それよりも家の壁に燃え移りかける火のほうが心配でたまらない。

アル義兄さんは卵を溶き終わって隣のフェア義兄さんの仕出かした惨状を見て、直ぐに火を止めてくれたがこちらを見て驚愕したように目を見開いた。

フェア義兄さんは顔をこれ以上ないほど強く掴んで傷の状態を診ている。その目が潤んで今にも泣きそうだ。

「ああーもう！ 何があつたの！」

私の顔に掛かっている赤毛を除けては真剣に傷を見ている。だが、混乱していてどうして良いのかわからないらしく顔を強く掴んでばかりだ。

「に、ちよっ…と…」 喋れない。状況を説明したいのだがあまりにも強く掴んでいる為、口を動かす事が出来ない。

困ってアル義兄さんの居たところを見ると何故かそこにアル義兄さんは居ない。どうすれば良いのかわからなくなり、フェア義兄さんのなすがままになっていると。

「兄さん。放してあげて、」

後ろからアル義兄さんの声がかかり、私の顔を掴むフェア義兄さんの手に私の後ろから手が伸びてきた。

フェア義兄さんの手が外されて、私が直ぐに後ろに振り向くと手に救急箱を持ったアル義兄さんが居た。

「シンデレラ、ちょっと痛いかもしれないから……」

そう言っただけ消毒液のしみ込ませた清潔な布を傷口に当てた。消毒液がしみ込み傷口が傷むがアル義兄さんは慌てない。消毒は少々強引でもしたほうがいいと解っているからだろ、どれだけ私が痛がってもアル義兄さんは手を止めなかった。

消毒を終えた義兄さんは私の顔に包帯を巻きながら言ってきた。

「どうしてそんな事をした？」

まるで、全てを知っているようにそういうアル義兄さんに私は驚いた。あの時その場に居たのは私と母さんだけだった。だが母さんは部屋にいてそれを見ていなかったのだ。

私は疑問の目でアル義兄さんを見る。

「救急箱を取りに行くついでに義母さんの部屋を見てきた。あの部屋には凶器になるようなものはないし、義母さんの爪にも何の痕もなかった。でも、部屋の扉を収める枠の角に血が付いていた。あそこはぶつかった程度でそんな怪我するようなほど鋭くはない。」

後は自分であそこにぶつけるしか可能性はない。と、アル義兄さんが私を睨む。きっと私を責めているのだ。

本当に……私は馬鹿だ。

「……母さんが私の名前を呼んでくれたんだ。」

その言葉に多少驚いたような顔をするがアル義兄さんなりに納得できたのだろ。唯一人アル義兄さんの隣に移動してきたフェア義兄さんだけが困っている。

「で、傍にるように言われた。でも、そのまま出て行ったら母さんはきつとまた、あんなふうになっちゃおうと思って…」

それだけ言えば、もうアル義兄さんには言葉は要らなかった。包帯を巻き終わり、暫く私を見つめると深く溜息をついた。

アル義兄さんが真っ向から私を睨む。その顔は完全に怒っていた。私に怒っている、なんと怒られるのだろうか。そんな事をするなど言うのだろうか、何にしても私は怒られるべきだろう。その覚悟は出来ていた。

パシンッ！

左の頬に衝撃が走った。それは痛みだった。

頬を叩かれたのだ、決して目の前で睨んでいるアル義兄さんではない。

フェア義兄さんだ。

私は予想だにしない所からのビンタに驚いていた。アル義兄さんのほうは横で突然私を叩いたフェア義兄さんを見つめている

「…馬鹿！ どうして、そんな事をしたの！」

そう言っ、私を叱る義兄さんは泣いていた。今まで見たことがないほど、取り乱していた。目からは涙が止め処なく流れ落ちていく。眉間に皺を寄せ、必死で涙を堪えながら言葉を紡ごうとしているのが解る。

「母さんが…」

「違うよ！…！」

「どうしてそんな事をしようと思ったの！…！」

先程とあまり変わらない質問、でもかなり答える内容が変わってくる。私は、何を思ってたこんな事をしたのか――…。

「…こわかった。」

涙が込み上げて、息が出来なくなりそうだった。

「このままで出て行って、怒鳴られるのが。怖かったの…、」

唯、怖くてたまらなかった。大好きな母さんに全てを使って拒絶されるのが…、ただその優しい声で笑いかけて欲しかった。

「優しくして、欲しかった…、だから…、母さんが父さんにそっくりな顔を嫌ってるなら、こわしてしまえばいいって…。」

そっくりなのが駄目なら、壊してしまえと。唯それだけで…。

「それだけ…、それだけだったんだ…。」

静かに、アル義兄さんは息を吐いた。フェア義兄さんは私を抱きしめると、そのまま床に崩れ落ちた。

「っ、シンデレラちゃん。そんな事して、嬉しかった！？ お母さんは、その傷を見て喜んでくれたの…？」

耳元でフェア義兄さんの嗚咽が聞こえる。本当に心配してくれていた。フェア義兄さんも怖くて仕方なかったとでも言うように痛いほど私を抱きしめる。

「…そんなわけない…。…後悔してるんだよ…？」

込み上げた涙が、ずっと堪えていた涙が自然に溢れ出す。頬を伝って、私を抱きしめている義兄さんの肩に染みを作る。

「…そう思うなら、謝るんだ。シンデレラ。」

それまで無言で様子を見ていたアル義兄さんがそう言った。フェア義兄さんの後ろ、抱えられている私の目の前にしゃがみ、目線を合わせる。

「…悪いと思うなら、謝りなさい。馬鹿な事をしたと、心配させたと、謝るんだ。シンデレラ。」

ずっと強く睨んでいたアル義兄さんの顔がとても優しい笑顔に変わった。それを見ると更に涙が溢れてきて、もうどうしようもなかった。

「ごめんなさい…。」

「ごめんなさい。ごめんなさい、とフェア義兄さんを抱きしめて謝ると、二人も同じように謝った。

叩いてごめんなさい。睨んで不安にさせてすまない。と、何度も何度も。

結局、私は姫様と同じように謝る事すらも解らなくなっていた。そして、義兄さん達がこんなにも私の事を思ってくれていたのだと知らなかった。

なき止んだ後も長い間抱き合うフェア義兄さんと私を何処か羨むように見て、アル義兄さんもフェア義兄さんごと私を抱きしめた。「…あー、シンデレラ。その傷、一週間ぐらいで治ると思うが、目の間の部分だけでも傷跡が残ってしまうだろう。」

その言葉に再び泣き出したフェア義兄さんを慰めるのが大変だったが、その後は楽しいものだった。

アル義兄さんの玉子焼きは美味しかったがフェア義兄さんの「野菜炒め」は暖炉の炎の中に消滅した。

今日、初めてアル義兄さんがとても賢く、フェア義兄さんがとても間抜け事を知った。

フェア義兄さんは可愛くて、アル義兄さんは格好よかった。

10：幼き日の出逢い

小鳥が囀るところか、城内が賑やかになって来た昼ごろ。私はようやく爺おじいこと、【ヴィルネール卿】を捕まえた。

今日は昨日抜け出して爺の財布を掏っていたのがばれていたらしく、朝から爺と話す時間すらもなかった。その上、財布を掏ったのが気に入らなかつたらしく一回も出会えなかつたのだ。

ようやく見つけたのは中庭の一つで、昔から私が遊び場に使っていた芝生が一面に敷き詰められた場所の端にある廊下だった。

「おや、姫様。もう今日のお仕事は終わったので？」

シャアシャアとそんなことを聞いてくるこの爺には本当に腹が立つ。私は爺に向き直り、とりあえず話し出した。

「ええ、礼儀作法からダンスまで全て終わりました。舞踏会の段取りは既に頭に叩き込んでいましたから一発でOKでしたし、勉強は元々今日はお休みでした。仕事の方は昨日の朝のうちに終わらせておりましたので事態が急変しない限り大丈夫ですわ。」

そうですか。と穏やかな笑みを浮べて答えるが、ほんの微かに聞こえた舌打ちは幻聴ではない。私の天才振りを爺は舐めていたようだった。

「それで、昨日は随分お楽しみだったようで。」

「そんな事ありませんわ。少々困った事になってとある方に助けてくださいましたもの。」

その言葉に爺はこれ好機とでも言うように突っ込んでくる。

「おやおや、城下で迷子にでもなったのですか？ これでは政治の方でも小さなミスがあるかもしれませぬね。」

「いえいえ、なんとも計算外な出来事でしたので仕方ありませんわ。」

一体どなたが予想できますかしら、全く知らない女性たちが自分を
取り囲んで襲ってくるなどと。」

爺は微かに顔を引きつらせたが、できるだけ取り繕う。表面上に
こやかに会話しているようだが単純に貶しあっているのだ。

「それとも、貴方には予想できませんでしたかしら？ クソ爺。」

最後にそう付け足すと、爺はにこやかな笑顔をなくす。その喋り
方をやめると言う意味で言った【クソ爺】だが、直ぐに伝わったよ
うで溜息をつく。

いきなり前髪をかき上げる爺。皺は多いが容姿はそんなに悪くな
い。むしろそれが良いと城内では評判だ。

「いきなり口の汚い…。それで？ 何の用です？」

私が用もなく自分に話しかけることがないと思っっているようだ。
事実そうではあるが…。

【ヴィルネール卿】それは王室付召使である爺の名前。もとより
ヴィルネール家は貴族の中でも名家で、王族に忠実でその反面とて
も賢い。

だが、幾ら王族の立場が危うくとも裏切る事がなかったことから
今でも爺の家は名家だ。貴族であるのだから貴族で収まっていれば
良いと思うのだが、何故か決まって王族付召使になりたがったそう
で、今でもその立場にある。

「えっと、」

(……まずい。)

何を聞けば良いのか解らない。何せあの方についての情報が少な
すぎる。

(会話の中に何か…)

彼は私の事を知ってるといった。私の瞳の事を知っていると…。
とりあえず、それを聞いてみることにした。

「ねえ、私の【瞳】の事って貴族の間では有名なの？」

それを聞いた爺はとんでもない、と手を振って否定する。

「姫様の【瞳】は城内では一部の人間しか知りませんし、貴族の場合家家の中でもほんの一握りしか……」

その事実には驚く。外交時には数人瞳の事を知っていたから国内では有名なのかと思っていたがどちらかと言うと国内の人間の方が良く知らないらしい。

そして、同時に喜んでも居た。そうになると人数はかなり限られる。その上、あの赤毛だ。

「その知っている人間の中に、赤毛の人っている？」

爺は首をかしげる。赤毛はかなり少数で居たのなら目立つはずだ。誰とわからずとも少しは特定できるはず……。

「……その方の年齢は……？」

「私と同じぐらいか少し上よ。」

そして再び考える。

…… 案外、簡単に見つかるかもしれない。よく考えれば彼は私が姫とわかってても決して慌てなかったのだ。何度も見たり会ったりした事があるのかもしれない。

「子供……ですね。」

爺が何か思い出しかけている。私は少し背を押すようにもう一度言った。

「綺麗な長い赤毛だったわ。」

するとほんの暫くした後、爺が私に驚いたような顔をして向き直る。

「姫様、姫様もその方には出会ったことがありますよ。」

予想はしていたがこうもあっさりと言われてしまつては、こちらが驚いてしまう。だが、それを知ってか知らずか爺は続ける。

「実は貴族の中には王の補佐官を勤める家があるのですが、変わり者が多い上にその家すらも貧相なものに住みたがるので中々知られ

ないのです。」

…初めて補佐官と言う役職がある事を知った。そして私が知らなかったことを当然だと言つてのける。

「仕事の腕は見事でしたが、先代は子供に仕事を継がせる前に失踪してしまつたのです。」

だから、今はその立場には自分がいるのだとも爺は言つた。

（失踪？）

…だつて、おかしいじゃないか。あんなにも尊敬した様子だつたのに、【失踪】なんて一言も言つてなかつた。仕事場にも連れてこられたと言つていた。

「時折、仕事を教える為に連れてこられてね。その子が見事な赤毛で…、その容姿も父親に良く似ていましたが母親にも似ていると先代は言っていました。恐らく、今はとても美しくなっているかと。」

爺の言うように確かに彼は美しかった。でも…。

爺に視線を向ける。すると何を言いたかつたのかわかつたようで、中庭の真ん中を指差して微笑つた。

「此処で先代の姫様と遊んでいらしゃつた時に一度だけ、その子を連れてきたのです。仕事の内容は私や子供には教えられませんでした。が、離れるように言われて、その子は姫様が遊んでいる姿が良く見える中庭の隅に立っていたのですよ。」

何処か靄の掛かつた景色が脳裏に蘇る。お城の中庭、子供の頃にお母様と遊んだ中庭の景色。その中に、一人だけ隅に佇む子供が居た。

私が楽しんでいるのにそれに答える様子もなく唯そこに立っていたから、何となく話しかけた。

『ねえ、どうしてそこに居るの？』

その子は私よりも遥かに大人びた笑顔を浮べて、お母様を指差した。

『君のお母さんに私の父が用事なんだ。』

良く見るとお母様の隣にはとても綺麗な男の人が立っていた。

『へー、じゃあ私の遊び相手をしないのはどうして？』

そついうと、その子は心底楽しそつに笑うと何処か見下したように言つた。

『じゃあ、私の話し相手をしなかったのはどうしてなんだい？ 真紅の瞳を継ぐ「姫様」？』

何となくその対応に腹が立つて、拗ねたようにそつぽを向くとその子は謝りもせず唯一言。

『父の用事は終わったようだから、もう行くよ。 - - - - - 友人さん。』

本当にそれだけだった。それだけの出会いだった。けどその会話だけがとても印象的で私はずっと覚えていたのだ。私を【姫様】とわかつていて機嫌をとる事はせず、そう言い返したのは――。

「その時に気になったのか姫様がその子に話しかけて、話しているうちに仕事が終わった父親に呼ばれてその子は帰っていきました。」
そう、それから何度か此処で遊んだがそれ以降、出会えることはなかったのだ。そしてその子にはもう出会えることはないのだと思つた私は此処にくる事をやめた。それからは記憶が朽ちるのを待つばかりだった。

「嗚呼、思い出しました。父親の方は【レイン・ライナー】。ライナー家の当主です。」

ライナー……。そついえば、街であつた女がそんな名前を口にしていた。その名前もまた、【レイン・ライナー】だつたと思う。その家では名前も継ぐのだろうか。

「……ねえ、その時私はなんて話してたの？」

覚えていないのですか？ と何処か驚いたように爺は言つた。覚えて

えている、でも、最後の言葉だけ途切れてしまっていてなんと
言ったのか覚えていない。

「私も詳しくは覚えていませんが姫様が生意気な事を言っていたの
は覚えています。」

その白髪頭を禿頭に進化させてやろうかと思ってしまった。そし
て疼く手を押さえている間に爺は話を進める。

「ですがその子も負けずに生意気な事を言って…、嗚呼、最後に言
った事だけは覚えています。」

「…なんて言ったの？」

「『もう行くよ。同じ真紅を持つ友人さん。』と」

懐かしい記憶の中、置いてきた感情が胸に蘇る。心臓の奥が熱く
なり、鼓動が早くなる。

路地で感じた感情、そのもの。

私は胸を押さえ、唯その感情を押さえ込む。

（まだ、）

まだこの思いを解放するのは早い。

そう思うと、目の前で私を見て首を傾げている爺に言った。

「私、舞踏会で踊るわ。」

その言葉に爺は驚いた顔をしたが、直ぐに微笑んだ。

舞踏会では踊って相手を見極める。ダンスの技術もそうだが、誘
う時の礼儀作法そして踊る時に見えるその人物の本性を見極める事
を目的にしている。だが、私は乗り気でなかった為にダンスの時間
は席に座り、飾りになるつもりだったのだ。

「それはそれは…、舞踏会の招待状は町中の男性に身分関係なく送っています。きっとライナー家の子も来る事でしょう。」

この会話だけで何を思っているのかを解ったらしい爺はまさに訳知り顔で微笑んでいた。

流石に少し腹がたったので踵で爺の向う脛を蹴り飛ばし、爺の脇を走って行った。

後に残された王族付召使は痛みを堪えながらも姫様の走り去った方向を見て呟く。

「…もう、忘れてしまっではいませんか？」

苦笑いを含んだその呟きはこれからの事を見極めようとしているようだった。

11：二人の変化と失踪の真実

朝の仕事を終えて、朝食をとった後。目が覚めた義兄さん達の行動は早かった。

昨日壊した扉を直してもらっている間にアル義兄さんは私の包帯を取替え、フェア義兄さんはどういいうわけか外で薪割りをしていた。包帯を巻き終わった後、私は湯を沸かしそれを人肌に薄めたものを洗面器に移し、手ぬぐいを浸けて母さんの部屋へ持っていった。

母さんは昨日と同じように落ち着いている様子で私を「ルイ」と呼んでいた。そして、傷は大丈夫かと聞いていた。私が手当てはしたし、一週間ほどで治ると言うところへ安心したように何時もの様に窓の外を眺めた。

私は洗面器を机の上に置くと、予め置いていた朝食を持って部屋を出た。

それを持ってキッチンに行くと裏から入ってきたフェア義兄さんが居た。

「あ、シンデレラちゃん。」

昨日色々あった所為か、フェア義兄さんにいつもの鬱陶しさはない。むしろ優しい兄と言った雰囲気を見せている。

義兄さんは薪割りをしていたからか、薄手のシャツを着て珍しく髪を一つに纏めている。

「…似合いますね。」

唯それだけ言って、母さんの朝食の跡を片付ける。そして片付け終わった後、まだ先程見たままの格好で突っ立っていた。

とても感激しているような、感動に震えるように唯嬉しそうな顔をして硬直している。

「どうしました？」

はっ、と気が付いたようにこちらを見ると義兄さんは叫びだした。
「嬉しいんだよ！ 初めて似合うなんていつてくれたから！」

そういえば、私はあまり義兄さん達の服装などを褒めた事が無い。褒めたとしても棒読みでいまいち心がない。それが今さっきの言葉は自然に口から出た言葉で心が入っていた。

キッチンの近くに珍しく義父さんが通った。最近影が薄すぎて忘れていた。

「父さん！ シンデレラが！ 僕の格好を似合っつて！」
感動のあまり、誰かの伝えたくなつたようだ。義父さんはキッチンを覗くと「珍しいな」の一言だった。

「……お義父さんは気が利きませんね。」

息子がこんなに喜んでいるのだからせめて「そうだな！」と元氣良く言つてほしいものだ。案の定、義兄さんもとても残念そうな顔をして義父さんを見ている。

私の言葉と義兄さんの顔に居た堪れなくなった義父さんは「どうせ俺なんてえええ！！」と嘆きながら表に飛び出した。

「義兄さんは案外すつきりとした格好が似合いますよ。」

逃げ出した義父さんを見無視して、話を進める。義兄さんは何か悩んだ様子で暫く目線を泳がせた後、私に聞いてきた。

「……どんな風にしたらほうがいいと思う？」

「とりあえず、アル義兄さんみたいに髪の毛を切つて見ればいいのでは？」

即答したところ、義兄さんはあっさりと「そうしよう」と言っている。

因みに、今言つた事は本気だ。義兄さんは髪が短い方が似合うだろう。私がキッチンから出ると玄関には外着に着替えたアル義兄さんが居た。

「義兄さん、どうしたんですか？」

もうデートする相手すら居ないので出かける理由は無いはずだ。舞踏会の服は既に仕立てあがっていたので義兄さん達のクローゼットに納めている。

アル義兄さんはフェア義兄さんを見ると服を着替えるように言った。そして、側に寄った私を見た。

「…買い物だ。シンデレラは出れないだろう。」

そう言ったアル義兄さんに私は首を振る。

「いえ、買い物なら私が行きます。」

「駄目だ、その怪我で何処へ行くんだ。男装したとしてもばれる可能性が高いだろう。それに下手に雑菌が入ると治りが遅くなる。」

目の前に指を突きつけられ、反論が出来ない。何故か今日の義兄さん達は私の仕事を先にしていたと思っていたら、そういうことだったらしい。

階段から、扉を直していた人が降りてきた。アル義兄さんが賃金を払うと扉を開けてその人を見送った。そして彼の去ってゆく方向を二人で見詰める。

「…そういえば、彼らの商売はあまり政治などの影響を受けませんか。」

反論も出来ない上に仕事が奪われて暇な私はフェア義兄さんが来るまで世間話をすることにした。

「そうだな、もとより彼らの使う部品などは輸入したもので価格は安定しているからな。家具の修理を専門にやっているから仕事が無くなる事もない。一番安全な職だな。」

「その分、収入は多くありませんが、地道に生活できる分は稼げるでしょう。」

「そういえば昨日、初めて【ストーカーちゃん】の本名を知りました。」

「ナイリーニ・アイリーナか。あの子はしつこかったな、最近懲り

たのか来ていなかったが……」

シンデレラに標的を変えたのか？と、縁起でもない事を聞いてくる。私は絡まれるほど暇じゃないです。とだけ言つと義兄さんは続けた。

「彼女の評判は良くない。市場を支配しているナイリー二家の次期女当主という事をかなり鼻にかけている。」

「それに、貴族の中には農業とかの生産系にも手を伸ばしている人がいるから高い税をかけるナイリー二家を良く思つてないんだよ。」
後ろから声がして振り向けば、何時の間にか着替えて降りてきたフェア義兄さんが立っていた。義兄さんは気になるなら続けると言い、アル義兄さんはフェア義兄さんの情報に興味があるのか話を促した。

「元々先代の姫様の時に独占は禁止されていたんだ。でも、ナイリー二家の現当主が先代をうまく騙して禁止を解いたらしいんだよ。」
凄い狸でしょ。とフェア義兄さんは自慢げに微笑う。一体、その情報は何処から持ってきたのだろう。

アル義兄さんも気になって聞くと、フェア義兄さんは
「パン屋の二人に破れたシンデレラちゃんのエプロンをあげたら教えてくれたんだ。」

…ゴミの再活用はいいが、私のエプロンは大金以上なのか？そんな事を考えているとアル義兄さんはフェア義兄さんの頭を引っばたくと買い物へ連れて行つた。

二人が居なくなつた後、暇でたまらない私は昨日父さんの【おもちゃ】箱の中から見つけた小さな鍵を使つてみる事にした。

二階にある母さんの部屋の隣、今も部屋に余裕があつたため誰も使つていなかった。

父さんの部屋だ。

部屋の中は一切、弄っていない。今でも部屋の窓の前にある机から「どうした、ルイ？」と父さんの声が聞こえてきそうだ。

私は机の右に備え付けられた引き出しを開ける。父さんが失踪した後、私は真実を探してこの部屋を探った。その中でも見つからなかったものがあつたのだ。

それは一冊の日記、父さんが欠かしたことがないかなり草臥れた日記だった。

日記を机の上に置く、すると積もってしまった埃が舞い上がる。私は慌てて目の前の窓を開けた。

徐々に空気の入替えられた部屋は再び息を吹き返したかのように明るく見えた。私はポケットから小さな鍵を取り出し、日記に差し込んだ。

カチツ、

そう、小さな音がして今まで読まれることを拒んでいた日記が開かれた。

始まりは小さく、それでもできるだけ丁寧に「就任を記念して日記を始めた。」とだけ書かれていた。どうやら、当主になったその日に日記を始めたらしい。

日記を読み進める。仕事は幼い頃から徐々に仕込まれていたものでそれほど大変だとは思わなかったそうだ。礼儀作法も完璧で、最初には突っぱねていた姫様も気に入ってくれたと。

父さんは先代が展開させた貿易にも関わっていた。補佐官とは、王族の仕事や私情に関することの相談に乗り、正しい方向へと導く仕事らしい。東の国の技術の素晴らしさを先代に説いたのも父さんだった。

そして、この国の力を欲した好戦的な国からの良からぬ噂を逸早

く先代に届けたのも父さんだ。噂が嘘でも戦力は整えるべきだと教え、国の戦力を向上させ戦術を説いた。そして噂は本場で戦力を整えて待っていると思わなかった敵国は、攻めて返してきた軍勢に取り乱した。

その戦争はこちらの勝利に終わり、そして軍勢の先頭に立った騎士は英雄となった。そしてその騎士が母さんの恋人だった。

戦争の勝利を祝う舞踏会で出会った母さんに恋し、そして同時に母さんの恋人を戦場に送ったのは自分だと責め続けてもいた。その後直ぐに結婚し、子供を身籠った幸せそうな母さんを見て罪を黙ったままでいることが恐ろしくなった父さんは母さんに真実を打ち明けた。母さんは「仕事だった」と許してくれてそして、私が生まれた。

直ぐに次期当主にすることは決まった。

ライナー家は代々、一番最初に生まれた子を当主にする仕来りがある。その仕来りの中には女が生まれた場合男装させることも含まれるらしい。男装させるのは社会的に不利な立場に立たないようにする為のようだ。

昔、父さんに何故姫様と話をすることが出来るのかと聞いたことがある。その時、父さんはこういった。

『姫様と私達は光と影。光の中、大きく働くのが姫様で、その後ろの影で、大切な話をするのが私達。二つは対で、どちらも欠けてはいけない。そしてどちらも正反対なんだよルイ。嗚呼、それにしても、ルイはやっぱりとて綺麗になるだろうね。母さんよりもきつと魅力的な女性になるだろう。私も娘でなかったならきつと、閉じ込めて泣かせて虐めて楽しんでしまっているだろう。嗚呼！ 実に残念だよ、ルイ！！』

後半は何時ものように父さんの変態発言だったが、前半は真面目に答えてくれたのだと思う。二つは対、それは一体どういう意味だ

ろつ。

父さんは自分の時のように幼い時から礼儀作法から仕事の内容まで教えようとしていた。それは私も知っている通りだ。だが、日記の内容が微かに悪い方向へと行っている気がする。

§

今日、ナイリー二家の当主が姫様との対談を申し出てきたとヴィルネール卿が言った。

彼はどうやら市場の独占を行ないたいらしい。独占する事は他のものに不利益が及び国の経済が乱れる。

ナイリー二卿は口が達者だと言う。決して姫様に会わせてはならない。私はヴィルネール卿に対談を断るように言った。

§

3月 17日

卿が再び対談を申し出た。私は対談を断るようにヴィルネール卿に言うつと姫様に会った。

姫様は最近、姫君様と遊ぶことが日課となっているようだ。尋ねた時、姫様は中庭で姫君様と遊んでいた。悪いタイミングに尋ねてしまったようだ。私はヴィルネール卿とルイを遠くへ移動させると姫様に決して市場の独占禁止を解かないように念を押した。

姫様には大体何を伝えたいのかわかったようだ。

ルイを連れて帰るとどうやらルイは姫様と仲良くなったようだ。

これならこれからの交流は楽しいものになるだろう。

§

3月 23日

卿が直接城にやって来た。

幾ら念を押していても用心は必要だ。私はヴィルネール卿に、卿にお歸りいただくように言った。

彼は次も来るといった。

…ルイを連れてくるのをやめよう。

§

3月 25日

卿は宣言通りにやって来た。ヴィルネール卿を跳ね除け姫様の居る中庭に行こうとする卿に私は止めに入った。

そこで、私の存在を知られてしまった。

私こそが補佐官で卿の話を通していなかった事を。

§

4月 2日

卿は姫様に近づくことを辞めた。代わりに私の事を調べているらしいと、パン屋は言った。

彼の息子達も順調に育っているらしい、彼らも家業を継ぐのだらう。

…私は、ちゃんとルイを育てられるだろうか。

§

4月 21日

家や家族のことまで知られてしまった。

卿は手段を選ばないようだ。唯、利益さえ得られればいいのか…。

この家の人間に変人が多い理由は、その人柄を知られないようにしていたのだ。そしてあえて家を質素にすることによって、家すらも隠していた。

だが、卿の前に出てしまったことで全て水の泡だ。

嗚呼、ルイ。君だけは、せめて。

月 日

私は居なくなる。

姫さまは聡明な方だ。たとえ私が居なくともヴィルネール卿が居る。きっと何とかなるだろう。

ルイの教育は出来ていない。それなら仕事は継がれる事はないだろう。そうすれば、ルイ。君だけは無事で。

彼女と私の宝物。

日記は、それで終わっている。

これはきつと、父さんが失踪したその日に書かれた物。

何故母さんと私に何も言わずに居なくなつたのか、それが今解つた。あの【おもちゃ】は昔、贈られたものだった。恐らく日記の鍵は二つあつたのだ。もう一つは父さんが持って、出て行つた。

そしてこの鍵は私に託されたのだ。

何時かこの日記を読まれることを願つて、真実を知る事を思つて。

「…レイン？」

部屋の入口に、母さんが立っていた。私は後ろ手で日記を閉じる。母さんは私の顔を見て、何処か悲しそうな顔をした。

期待、していたのだろ。隣の部屋から音がして、父さんが帰つて来たのだと。扉の前まで来てページを捲る音が聞こえて、父さんがそこに居ると、喜んで。

母さんは、床に力なく崩れ落ちた。そして遠くを見ているような目で私を見る。

「…やっぱり、レインは私を捨てたのね…。」

遠く、父さんの面影のある私を通してその向こうの窓を見て。何処かに居るであろう父さんを捜している。

私は母さんの側に座り、その顔を覗きこむ。

「…母さんは、今でも父さんを愛してるんだね。」

そついうと、母さんはゆっくりと私の顔を見る。まだ少し虚ろな目で、それでも私の方を確かに見て。

その頬に優しく触れ、唯静かに話す。

「だから…捨てられたと、思つたんだね。」

母さんは徐々に焦点を合わせ、私を捉える。その途端、瞳が潤み今にも泣きそうな目で私を見つめる。

「それは私も同じだよ…？ でも、父さんは私達を捨ててない。捨ててないんだよ…！」

泣きそうな母さんよりも今は私に泣かせて欲しい。知らない、知らなかった。父さんは、恐らく、もう…。

それでも、それは母さんにはいえない。いえるわけがない。だって、もう十分傷付いている。私よりも遥かに、優しい彼女は全ての思いに押しつぶされ傷付いている。

「ルイ？ 泣いているの？ 大丈夫？」

母さんは私の頬に指を這わせ、涙を拭う。自分が悲しくても人を心配するこの人を、どうして私は悲しませる事が出来る？

「大丈夫だよ。母さん、もう。父さんは母さんを見捨ててない。ずっと、ずっと、愛してるって。」

私は母さんを抱きしめた。昨日、触れていた身体よりも遥かに小さく感じた。

昨日は【母さん】だった。でも、今は一人の【女】。小さくても仕方がない。だってこの人はとても弱いからだから。

「私も、レインを愛してる。愛してるのよお！ ずっと、ルイと同じくらいに！」

ずっと愛してるといい続けていた母さんを抱きしめ、私は一つの決心をした。それは私にとって今できること。

もう、昔のことはどうにもならないが、今起こりかけていることは如何にかできる。

昨日と同じように疲れて眠ってしまった母さんを部屋に運び、その身体の汚れを叩くとベッドに寝かせ、その涙を拭った。そして私は扉を閉めて、父さんの部屋へ行った。

12：一つの提案

「ただいま。」

義兄さん達が帰ったのは夕方だった。玄関に迎えに行くと、何故こんなにも時間が掛かったのかがよく解った。元彼女達に捕まったのだらう。

それぞれ服がかなり乱れており、二人ともボタンがなかった。だが、何より驚いたのはフェア義兄さんの髪がばっさり切られている事だ。

「…大変だったね。」

二人がキッチンに買って来た物を納める間に、私は二人の部屋着を部屋に取りに行った。

キッチンでそれぞれ服を受け取ると、着替え始めた。私は脱いだ服は全て畳んで持つてくるように言っと、暖炉に薪を継ぎ足してから母さんの部屋のランプを点けに行った。

一階に降りると食卓の上には二人の服が綺麗に畳まれていた。私はそれを大きな布に包み、明日仕立て屋に持っていくようにと義兄さん達に言った。

そして一番気になっていることを聞いてみた。

「それ、どうしたんですか。」

フェア義兄さんの頭を指差すと口を開きかけたフェア義兄さんを押しつけてアル義兄さんが言った。

「かなり遅くなった時に、家に帰らなければと言ってしまったてな。帰すものかと言わんばかりに襲われたんだ。その時私はうまく逃げられたんだが兄さんの髪の毛を掴まれてしまって…」

「朝、シンデレラちゃんが短い方が良かったの思い出したからね。買っていた果物ナイフで髪の毛を切ったんだ。」

その後は元彼女がショックで硬直しているうちに家に走って帰って来たらしい。

「まあ、髪の毛は配給されるだろうが…」

フェア義兄さんの髪はナイフで切った所為でバラバラでこのままでは毛先が傷んでしまう。それでも義兄さんは嬉しそうに笑っていた。…私は溜息をつき、義兄さんの髪に触れる。

「フェア義兄さんは極端すぎです。今から整えてあげますから、外に椅子を持って行ってください。」

流石にこれはアル義兄さんも止めなかった。直ぐに椅子を外に持つてくると私に上着を着せ、私は櫛と鋏を持って外へ出た。フェア義兄さんは既にその椅子に座っていた。

私は義兄さんの髪に櫛を入れる。出会った時は、まるで太陽の光を持つているみたいだと思っていた。光に輝いてキラキラと流れるように光るその髪が好きだった。切るたびに落ちる髪は夕焼けに赤く輝いていた。

「義兄さん…。」

私はフェア義兄さんの髪のように赤く染まる街をちらりと見て、二人に言った。

「私を、舞踏会に行かせて下さい。」

フェア義兄さんは驚きのあまりに振り返りかけたが、私がそれを押さえ込ませた。

アル義兄さんは私の目の前に移動して言葉の続きを待っている。

「…助けたい人が居るんです。」

「それは…、誰だ。」

私は迷っていた、言っただけなのに良いのかが解らなかったのだ。だが、助

けたいという思いは変わらなかった。

「姫様です。」

アル義兄さんは驚いたが私の話を静かに聞いていた。そして戸惑っていたフェア義兄さんも事情を理解すると協力すると約束してくれたのだ。

話が済んだ私は、唯静かにフェア義兄さんの髪を切りそろえていた。

12：一つの提案（後書き）

何時の間にかアクセス数二千を軽く飛んでました。

ありがとうございます！！

更新が遅い作品につき合っていただけで！

まだ続きます。出来る限りお付き合いをお願いします！！

13：舞踏会開始（前書き）

舞踏会は・じ・ま・っ・たー！！！！

一応シンデレラのパロディなのである程度展開は読めてしまつと思
いますがまあ…生暖かい目で…？

さあL e t ' s G o ! !

13：舞踏会開始

満月が空に浮かび、街が静寂に包まれる夜。

夜の街が静寂に包まれるのはきつとこの日だけだろうと、誰もが思う。今日は全ての店が閉まり、仕事のない女性たちは静かに家の灯りを消して寝息を立てている。

だが、そんな中で唯一つだけ賑やかな喧騒に包まれる場所があった。

そこは城内でも最も広い、舞踏会の為だけに存在している場所。今日は姫様の婿選びの為の舞踏会だけあって、男たちは何処か緊張した面持ちで舞踏会の開始の合図を待っている。

この舞踏会は男性限定である。下手に女性を招いてしまうとそれはトラブルすらも招き入れたことになる。よってトラブルを防ぐ為に女性を招かない事にしたのだ。

この舞踏会の主役である姫様は、会場の隅にある姫様のための花見に続く扉の向こうから何処か緊張した面持ちで舞踏会場を覗き込んでいた。

「…どうしましたか？」

その後ろから、声をかけるのは白髪の男性。かなりの年だろう。

「…こんなに居たら、また囲まれるんじゃないかしら。」

そう、私が心配してるのはその事だ。今、会場に集まっているだけでも予想外に人が多く、まだ増えているのだという事が信じられないくらいなのだ。

そんな様子の私に白髪の爺は静かに言った。

「大丈夫です。姫様の瞳の魅力でメロメロになっているのならば、そのまま言う事を聞かせてしまえばいいのですよ。」私は爺の提案になるほどと、感心した。そんな事ができるとは知らなかった。そういえば何故か爺は私よりも瞳の事に関して詳しい。

「それに、その瞳は特定の人には効きませんから……。」

それは初耳だ。私は爺にどうということかと詰め寄ろうとした時。

ゴーン、ゴーン、

鐘の音になった。

その音を合図に、会場内の人間が沸き立つ。舞踏会の開始の合図だ。

私は、爺の持つ蝶をモデルとした目元のみを隠す仮面を被り、深呼吸する。

「仮面もありますし、瞳の影響を受ける方は少ないと思いますよ。」姿勢を正して、毅然とした態度に変化する私に爺はそつと背中を押して進むように言った。

扉が開かれる。

「姫様のご登場です。」

沸き立っていた会場内に静寂が訪れる。皆一斉に私の姿を見ようとこちらを見る。

私は決して隙を見せぬように唯正面を見据え、歩き出す。その姿に一瞬誰もが息を呑むのが分かる。当たり前だ、私はその様に育てられたのだから。立ち姿に誰もを静めさせ、歩く姿に息を吞ませろと。

一歩一歩踏み出し、開けられた紅い絨毯の上を歩く、黒い豪勢なドレスを身に纏い。その長い髪はストレートのままで、小さく豪勢な髪飾りを一つだけつけて。

余計なものを身に纏わない。それが姫たるものの信念だと言う。戦いに慣れているものは必要最低限のものしか持たない。余計な補助をつけてしまえば、できることが制限されてしまうのだから。

花道の先、そこは王座だった。

一度王座に座り、開会の挨拶をしなければならない。そして、その後ダンスを踊るのだ。備えられたディナーは余計な人間を惹き付ける為の【^{ふるい}篩】のようなものだ。私と添い遂げる人間には余計な欲を持つ人間は要らない。

王座に座り、会場内を見渡す。そこにあの特徴的な赤は見あたらない。

(…彼は、)

居ないということないのだろうか。それとも、単なる遅刻だろうか。どちらにしても王座にいるうちにどうか、来て欲しい。此処から降りてしまうと捜す事がとても困難に成ってしまう。

「…会場の皆様。ようこそ、我が城へ。」

静かに話すだけで、声が響き渡る。私を追っていた視線が私の顔をでは無く【姫】である私を捉える。

「今宵は私の婿選びの舞踏会にご参列いただき有り難う御座います。」

「婿選び」その言葉に無言のまま会場内が沸き立つのを感じる。

「この舞踏会にご存知のように仮面舞踏会です。お互い、容姿や身分に関係なく交流をさせていただけるようになって下りますので可能性を嘆いている方はご安心下さい。」

そう、そのためだった。美しい容姿のみに惹かれないようにこの舞踏会は決まって仮面舞踏会だった。商談も、偏見も関係ない、そんな舞踏会をするのだ。

(もしかすると、)

彼もまた、身分を隠す為にその赤毛を隠しているのかもしれない。あの赤毛を見れば、誰もが彼の正体を見破ってしまうだろう。

「…挨拶の後、私は王座から降ります。ダンスに誘う事も許されませんので、どうぞ舞踏会をお楽しみ下さい。」

私が王座を立つ。するとそれが合図のようにオーケストラが演奏を始める。最初は、単純なワルツだ。

「姫様、私と踊りませんか？」

そう言っ て私に近付いてきたのは金髪の髪の短い男だった。私はその男が手を差し出すのを見て、そつと、その手をとった。

14：煌びやかな舞踏会に潜む思惑

街から見える城の正門とは正反対の位置にある舞踏会場の入口。

昔から、舞踏会の入口はそこだったらしい。

私は義兄さん達が用意した馬車に乗って、その入口に向かっていく。

私の相談に義兄さん達は迅速に対応した。フェア義兄さんの髪の毛を切り終わった後、アル義兄さんは念入りに傷の手当てをして包帯を巻き変えた。

そして食事の時は、舞踏会に備え立食式の礼儀作法をフェア義兄さんに叩き込まれた。作法は完璧だったのだが、人を魅了するエロスがないと怒られ、フェア義兄さんはアル義兄さんに怒られた。

そして私用の舞踏会の衣装を職人姉妹に注文してその日はダンスのレッスンだった。

まず、どちらが女性パートを踊るかで義兄さん達がもめ、最終的に二人を踊り比べてみることになった。フェア義兄さんのほうは完璧ではなく、ミスも多いがそれを補う麗しさとセンスがあった。アル義兄さんはやはり綺麗に踊りきった為、二人を交互に使い分ける事にした。

何度か踊って、もう教える事はないと言われてしまった。何故そんなにできるのかは既に説明してあったが、それでも驚いてしまうようだった。

「シ、レイン。一応、偽装した招待状はあるが、万が一ばれた時は兄さんに誘惑させるから、その内に会場内にもぐりこめ。」

いきなりアル義兄さんがそういうと、フェア義兄さんは珍しく文句を言わずに胸を張っていた。

「いやー、実は【あの子】って貴族じゃなくてお城の兵士だったらしいんだ。で、入口で受付やってるから、僕が犠牲になるから気にせずに行つて良いよ！」

そう言つて立て指を突き出す義兄さん。【あの子】って…。

「義兄さん…。」

軽く心配そうな顔をして何処か嬉しそうなフェア義兄さんを見詰める。アル義兄さんは何時ものようにフェア義兄さんを静かに見詰めている。

「そんな顔されたら喜んで見棄ててあげられます。」

有り難う御座います。と義兄さんにお礼を言つと、フェア義兄さんは困つたように縋つてきている。

「ちよつ、レインちゃん！そこは有り難うだけでいいんじゃない！？」

喜んでつて何！？と叫ぶフェア義兄さんをアル義兄さんが静かに笑っている。最近、珍しい義兄さんを見る事が多い。それとも…、私が義兄さん達をちゃんと見るようになったということなのか…？

そんなゴタゴタを馬車の中で繰り返しているうちに舞踏会場の入口に着いた。

大きな城を回りこまなくてはいけないので、かなりの距離があるのだ。金のあるもの馬車で、ない者は思い思いの乗り物で此処まで訪れる。

馬車から降りる前に目元を隠す仮面を付け、義兄さん達の後ろを付いてゆく。顔の傷は都合良く仮面で隠れている。

会場の入口には私たちと同じように仮面を被り、豪勢な男物の衣装を纏つた髪の高い綺麗な男の人が立っていた。彼は本当に【あの子】なのか…？

アル義兄さんは自分達の招待状と私の偽装した招待状を彼に手渡

す。中を開き、隅々まで読んでいる。だが、彼の視線は私の招待状で止まってしまった。義兄さん達は表情には出ていないが内心冷や冷やしている様だ。私は精一杯なんでもない様子を作る。

彼は招待状から顔を上げ、私とそして義兄さん達を見た。そして私の招待状を見せる。

「これ、偽物だね。この人物は失踪しているはずだ。」

やはり、駄目だった。そもそも住民登録がない名前を使う方が危ういと言われてしまい、仕方なく父さんの名を使ったのだが、駄目だった。

フェア義兄さんが続けようとする彼に近付き、甘く微笑んて言った。

「そんな事ありませんよ。その名前はそこから受け継いだ方のことなのですから…。」

彼はそれを聞くともう一度考え始めた。私は住民登録されているが、どの様に登録されているのかわからない。その事も義兄さん達もわかっているのかフェア義兄さんは既に作戦を実行に移していた。「ねえ、私達を入れてはくれませんか？ その、貴方の美しいお心に免じて…。」

そして彼の掌にキスをした。義兄さんの顔は引きつってしまっている。アル義兄さんも何故か【あの子】とは視線だけはあわそうとしない。それにしても…彼がアル義兄さんを見詰めているのは何故なのだろう。

彼はもう一度だけ私とそして義兄さん達を見て、溜息をついた。

「…本当に、素晴らしい兄弟愛シスコンですわ…。」

【あの子】が前髪をかき上げる。どうやら【レイン＝私】だと既にばれていたようだ。そして、花のように笑っていった。

「入ってもよろしいですわ。灰被りさんの美しさに免じて…。その髪、似合っていますわよ。」

そう言つて指差すのは自分の頭、私は今髪を黒く染めている。それだけで案外人は解らないものだが、彼には解ってしまったようだ。「ですが…。」

そういうと、アル義兄さんの襟首を掴む。アル義兄さんは顔が引きつり、冷や汗をかいている。

「アルさんはお持ち帰りますわああああああ!!」 彼（彼女？）は、アル義兄さんを抱えて、城の中に走っていった。連れ去られてしまつてはどうにも出来ないので私とフェア義兄さんは会場に入ることにした。私達と入れ違いに【あの子】の代理の人が出てきて再び受付をしている。

「…【あの子】ってアルが好みだつたんだ…。」

「だから義兄さん、あんなにも視線を避けていたんですね…。何があつたんだろう…。」

舞踏会の開始を心待ちにしてる人々の間をすり抜け、花道の近くを占領する。そして花道に端にある姫様が居るであろう扉を見る。微かな隙間が空いていて、そこから微妙に姫様の赤い瞳が見えている。

（…見えてますよ。）

そう伝えたくなつた。まだ舞踏会は始まらないらしく、私は何か言いたげな義兄さんと話をすることにした。

「…あの時に言つた事って…全部本当なんだよね？」

義兄さんは信じていないわけではないがそれでも信じられないらしい。私は一週間ほど前、言つた事を思い出していた。

『私の家は代々姫様の補佐官で、最初に生まれた子を必ず当主にする仕来りがあるんです。』

私は何かを見極めようとするように見つめてくるアル義兄さんに向かつてそう言つた。

『そしてその名の通り補佐するのが役目ですがそれと同時に、守ることも仕事です。』

『それが今のシンデレラと何の関係が…』

『あります。』

アル義兄さんの言葉を遮り、続ける。髪の毛を切っているので除け者にされているフェア義兄さんは何処か寂しそうだ。

『ナイリー二家現当主。彼が姫様の命を狙っている犯人で、そして――。』

私は沈黙する。この言葉を出すことすらも難しかったのだ。

『父さんを、私達から奪った犯人でもあるんです。』

怒りと憎しみ、そして悲しみに押しつぶされそうになって。

『昨日、街で姫様の出会いました。その以前に、幼い頃姫さまにあっているのですが…、大切に思う感情が、今でも私の胸にあるのです。彼女を、父の時のように利益しか考えていないような男に消されてしまいたくない……！』

何時の間にか私の手は止まっている。フェア義兄さんはそれでも動こうとしなかった。アル義兄さんは、目を閉じて考えている。

『…阻止したいのか…。舞踏会に参加できれば、助けられる当てはあるのか…？』

私は迷わなかった。頷き、舞踏会の内容を正確に話す。それは父さんの部屋においてあった書類に書かれていたものだ。

意識を自身の思考から現実に戻した。私は頷き、白い仮面を被っているフェア義兄さんを見る。周りに居る男の人は皆兄さんのことは知っている筈だが義兄さんに気付いていない。やはり髪の毛を切ってしまったからだろうか？ フェア義兄さんはまだ不思議そうに

している。

「…それなら、どうしてこんなことしてるの？ 姫様って…」
ゴーン、ゴーン、

フェア義兄さんの言葉をさえぎるようにして舞踏会開始の鐘がなる。

そして皆一斉に花道の端、姫様の登場するその扉を見た。先ほどまで落ち着いていた会場内が一斉に沸き立つ。

彼女はそれほどまでに興味を示す存在なのだ。

「姫様のご登場です。」
扉が開き、その姿があらわになる。

…町で出会ったときは別人だった。そのわずかに幼さを残す容姿すらも、全て「美しい」という言葉に変えて辺りに振りまく。歓喜の音が溢れるかと思えば、参列者は皆、口を閉ざしてしまった。

仮面を被っていても美しいとわかるその姿、その美貌。私はその姫様の姿に先代の面影を感じた。

開会の挨拶も終わり、姫様が王座から降り立つ。既に姫様は踊り始めている。今夜限りの特別な舞踏会。

姫様と踊ることに幸せを感じてる者が多いようだが、このダンスは全て相手を値踏みするためのもの、決して楽しいものなどではないのだ。

フェア義兄さんは試しに姫様と踊ろうとしているが男の防護壁が展開されていて中々近寄れないようだ。どうやら直感から義兄さんを近づけないようにしている輩も居るようだ。

私は姫様を遠めに見るだけで姫様と踊ろうとはしなかった。私は姫様に注目が注がれている中、探しているのだ。たった一人、この会場の中で息を潜ませているあの男を。

胸元を膨らませ、機会が来るまでその獣のような瞳をぎらつかせながら待っている。欲望に囚われた獣を。

煌びやかに過ぎ行く時間の中、私は犯人を捜すことばかり考えていた。

15：葛藤を掻き消す出来事

夜の闇も濃くなり、会場内にいる男性のほとんど手をとった後。私は再び王座に戻った。この中から一人、相手を選ばなければいけないのだ。

結局、彼は見つけることができなかった。墮落した貴族。その名をいつまでも持つてはいないのだろう。

私は頭を抱え、静かに悩んでいた。

私は彼以外の人間を選ぶ気はない。だからこそ、私は悩んでいた。

なんと言っべきかと――。

会場が暗くなり、参列した男性の間に緊張が走る。発表だ。

この時だけは会場内全ての明かりが消され、私のまわりだけに微かな明かりが残される。

「お待たせいたしました…。」 私は――王座から立ち上がった。

♪ ♪ ♪

見つけた――、

会場が暗くなったとたん、その男は胸を探り始めた。

姫様が踊っている時すらも姫さまに目を奪われるでも、ご馳走に喰らい付くでもなく唯静かに壁に佇んでいた招待客――、その風貌

から熟年の貴族であると直ぐに見当が付いた。そしてその膨らんだ太鼓腹が、大きな利益を得た人間である事を示していたのだ。

そして怪しんでいると案の定、男は行動を始めた。王座から遠く離れた、入口近く。門番や受付の人間は今回ばかりは警戒はしていても厳重な警備はしない。なぜなら姫様に魅了され、仕事をしない可能性があるからだ。

男は懷から、黒光りするものを取り出した。それは小さく、そしてとても奇妙に思えるものだった。私は、男の近くに歩み寄る。男は私には気付かない。

「お待たせいたしました…。」

姫様が立ち上がり、王座から少し離れる。

男は胸から取り出したものを遠く離れた姫様に向ける。男の視線は姫様に向けられ、他の神経すらも手に持つてるものに集中しているのか先程から近付いている私に気付かない。

「私が、選ぶ殿方は――、」

姫様が一息あけ、いよいよ相手を指名するその時だった。

「暗殺者だ!!!」

静寂の舞踏会場にたった一言、それだけが響き渡った。

だが、その静寂を破り、混乱を呼ぶには十分だった。姫様は素早く王座の横へと移動し、入口や城の内部へと続く花道の扉から兵や使用人が続々と出てくる。そして参列者はそれぞれ周囲を見回す。

男は慌てて手元のモノを下ろし、胸元に直そうとするがそうはさせなかった。

私は全速力で駆け寄り、男の手のモノを奪う。そして大声で叫んだ。

「暗殺者を捕まえた！！」

その声に、参列者が一斉にこちらを振り返る。その様子に慌てた男を私は膝の裏を蹴り、倒す。その様子を見ていた参列者はこちらに少しずつ近付いてくる。

男は弁解するように目の前で両手を振る。

「違う！ 私は暗殺者などではない！！」

「よく言っな！ こんなものを姫様に向けといて！！」

会場にやってきた兵たちが灯りをつけ、明るくなった会場の中心部に、私はソレを投げ捨てる。

こちらを見ていた参列者は、投げられたものを見て触れぬ様に身を引いてゆく。そしてソレが落ちた場所には円形に空間が出来ていた。

小さく黒光りする。それはこの国ではお目にかかれない代物だった。形から見るに、確かにそれは銃だったが、男の拳二つ分とかなり小さかったのだ。

その特徴から、その銃は【拳銃】と呼ばれることを、私は知っている。

床に押さえ込まれた男は顔を青くしているが、銃を取り囲む参列者の一人がそれを拾い上げる。

高級そうな服に青白い仮面をつけた灰髪の男は、その拳銃を良く眺めそして言い放つ。「…東の国で作られる最新の銃だね。懐にも収められる小さなものだ。これはよほどの貿易のパイプがなくては手に入らないね。」

拳銃を拾い上げた男は近寄ってきた城兵にその拳銃を渡し、下がる。すると押さえ込まれた男の直ぐ近くから全く同じ男が出てきた。その光景に参列者の一部は気付き、驚いたが直ぐに押さえ込まれた男に近づく男の方に注目する。

「さて、一体誰だろうね。」

私は男を押さえ込むのを止め、男を放すと灰髪の男は解放された男の仮面を投げ捨てる。

…その光景に私は参列者の人ごみにまぎれる。会場の天井へと投げられた仮面を見詰める者、仮面に隠れた顔を見ようと身体を伸ばす者。それぞれ私には注目しなかった。

そして私は灰髪の男で隠れて見えない男の顔を見ようとする参列者の一人を灰髪の男の前へ届くように押し飛ばす。

団体から押し出されるその光景は一部で既に起こっていた為、誰も疑問に思わなかったが仮面の下に正体を確かにその男は見ていた。

「ナイリー二卿!!」

16：訪れた混沌に見つけた姿

「暗殺者だ！……！」

私が参列者の方々に結果をつけようとしたその時。まるでそれを言わせまいとでも言うようにそんな叫びが上がった。

私は咄嗟に王座の横へ下がる。この状況でなら銃を使つての暗殺だろう。ならば、今まで狙っていた場所から移動してしまえばいい。そして会場を見渡すが、私の居る居場所以外は完全な暗闇になっているためその人影すらも見つけ出せない。先程の叫び声は後ろから聞こえた。ならば【暗殺者】も後ろに居るのだろう。私は必死で目を凝らして群集の後ろ。舞踏会場の入口付近を見た。
誰かが走っている。

花道や、入口から使用人や兵がやってくる。素早く爺は私の側に付いた。

「暗殺者を捕まえた！……！」

素早く兵達が会場内の灯りをつける。会場の後方で、誰かが倒れるのが見えた。

「……姫様。お下がり下さい。この場は危険です。」

「……この状況で逃げる方が危険ではないの？ 逃げれば、あの状況を振り切ってこちらに近づく機会ができると言つものではないませんか？」

どれだけの汚名を被っても私を殺そうとするのであれば、この会場から退場する為に花道を通るところを狙ったほうが得策である。今、逃げてしまえば機会を与えるようなものだ。

「違う！……さ……で……い……！」

「よく……！　こ……もの……む……！！」

群集のざわめきを裂く様に【暗殺者】とそれを捕らえたという男が言い争っているようだが、人ごみと喧騒からまともに聞こえない。明るくなつた会場の中、黒光りする物体が宙を飛ぶ。それは何処か危険なものに見えた。

カシャン！

磨かれた会場の床に金属が落ちる音がする。重く、鈍い音だった。何時の間にやら出来た群集の空間にそれは落ちていているようだ。それを取り囲む人間は興味とそして畏怖の目でその物体を見詰めている。

そんな中、一人の灰髪の男がその空間の中心に進み出る。暫くその物体を手に取り、値踏みするように眺めると何かを呟く。その言葉に兵士が男に近付き、それを受け取った。群衆の中心に進み出た男が下がると、今度は後方で押えられた男に近づく男が居た。

何故か、その男もまた投げ出された物体を拾い上げた灰髪の男だった。その事に気付いた人間が数人いたようだが、それでも【暗殺者】が誰なのか気になるようでそちらの方ばかり見ている。

私は灰髪の男が近づいたとき、反対に【暗殺者】から離れた人物に気付いた。恐らく、彼が【暗殺者】を捕らえたという人物なのだろう。だが、何故その場を離れているのだろうか。まるで逃げるように【暗殺者】から背を向け、人ごみに入り込んでいる。

髪は長く、後ろで一つにまとめているその髪色は黒。その仮面は赤い色だけのシンプルなものだった。

（…まさか、）

髪は黒いが、それでもその雰囲気は彼に似ていた。似ているだけかもしれない、その仮面の色彩から錯覚しているだけなのかも。それでも、私はその人物を目で追っていた。

「姫様。」

私は爺に手をつかまれ、引き寄せられていた。

気付けば、何時の間にやら王座の前の段差から足を踏み外しかけていた。それに気付かないほど私は彼だけを見ていたようだ。

爺が何かを言うが私は彼を見ていた。彼は【暗殺者】の方に必死で身体を伸ばす群衆の一人を灰髪の男の前に押し出した。何時の間にか【暗殺者】の仮面は外されていた。

「ナイリー二卿!!」

先程までのざわめきはまだ自嘲されていたらしく、その一言から会場内はより一層混乱する。

隣に居る人間を捕まえ、自分の持っているナイリー二卿についての情報を話し出す。

「権力者」「事情経済の支配者」色々な言葉が出たが、最終的に出てきたのは「独占の魔王」「物欲の化身」と言う言葉だった。何処からかナイリー二卿が市場を支配し、そして私がそれを切り崩そうとしていると言う言葉があちこちから聞こえてきた。

(何故…)

その情報はまだはつきりと確定はしていない為公表はしていない。知っているのはほんの一握りの人間だけだと言うのに…。

私は何かおかしいと思いながら会場を見回す。【暗殺者】がナイリー二卿だと確定しているのならば、彼は逃げられない。だが、【彼】は何処に居る…？

ざわめく人ごみの中を掻き分け、必死に抜け出そうとする彼の姿が合った。だが、会場は明るく、下手に動くと思われと思うているのか中々思うようには進めないようだ。

私は手首を握る爺の手を振り払った。爺は多少驚いたような顔をしたが直ぐにまた私の手首を掴み、逃げないように用心している。「痛いから放して欲しいただだわ!」

「痛くとも、貴方の命には変えられません。」

我慢してください。という爺は私の手首を掴み、会場の様子を窺っている。

私は彼の方をみた。こんなにも近くにいて見ることが出来ているのに、確かめる事すら出来ない事を唯悔しく思っていた。

17：逃走と追跡（前書き）

ぐるぐるにゃパーッ！

試験が近いと疼く疼くにゃので投稿なのです！
試験勉強？知るか！

範囲伝わったら各教科でできるわ！

っーか担任！連絡事項告げろや！！！！

こん畜生ーッ！！！！！！！！

17：逃走と追跡

（失敗だ。）

私はそう思いながらざわめく参列者の中をゆつくりと掻き分ける。本当はさっさと此処から抜け出したいのだが、この状態では下手に動けばナイリー二卿の共犯者と間違われて兵に捕らえられるだろう。かと言ってこのままここに居ても、暗殺者の第一発見者である私が事情などを聞かれてしまうのもまた不味い。

まさに万事休す。先程はどうやら舞踏会に参加していたレイとライの双子に助けられたようだ。だが、今は周りに味方は居ない。フエア義兄さんは何処かに居るのだろうけど、姫様と踊ろうと進み出て行つてからは何処に居るのか解らない…。

（味方…？）

この計画に味方など、侵入以降居なかった。先程は偶然にも気付いた双子が気まぐれに手を貸してきただけ、今もその前もこの会場内に味方は居ないのも同然だろう。

誰かに頼るのではなく、まず自分の力で何とかしろ。昔、父さんもそう言っていた。

（なら、この群衆の中から出ることさえ出来れば…）

そうだ、この中から徐々にでもいい。出られさえすれば、それでいいんだ。後は如何にかできる。城の間取りは全て暗記している、たとえ門から出ることが出来ずとも、堀からならば、抜け出す事が出来るだろう。

私は辺りを見回し、右手のバルコニーを目指す事を決めた。

「…ナイリー二卿は噂では聞いていたが、ここまでの事をする人間

だつたのだろうか？」

「私も、疑問に思っていた。彼は計算高く、このような無計画極まりない行為に走るだろうか。」

直ぐ横の二人組みの男がそう言った。彼は計算高く、腹黒い。そんな人間が暗殺などと言う愚考に走るのだろうか、しかもこんな犯人が断定されやすいような場で。そう言った疑問が賢い人間の間から徐々に広まっているようだ。

（…仕方ない。）

「よほど焦っていたのではないですか？」

その二人組はいきなり話しかけてきた見ず知らずの人間に驚いたようだ、同じような行為はそこかしこで見られていたため、落着くのもまた速かった。

「姫様の計画には穴が見つからない。あつたとしても姫様の力量で補えてしまう。そんな状況に陥っていた——、と言うのならこの行為も納得いきますでしょう。」

二人はお互いに視線を交わし、もう一度考え直す。事実、この取引には隣国の経済状況など、意志に左右される。だが、たとえ貿易の必要性がなくとも姫様の瞳を使ってしまう、この話はうまく進む。姫様の瞳は取引する際に有利な立場に立つことが出来るかなり便利なものだ。それを使つたと言う事実はないが、それを行っていないと言う事実もまたない。

先程までナイリー二卿の暗殺未遂を疑っていた二人だが、先程の説明だけで納得が言つたように再び周りの人間と同じように話を展開させている。

私は二人に背を向け、バルコニーへと歩き出す。皆、その場に立って話をしているだけなのだが、それだけでも多くの人が集まってしまうはその分移動も困難になる。未だバルコニーまではかなりの距離があつた。

ふと、肩を叩く手があつた。思わず振り返ると、そこには灰髪の

男が居た。仮面の色は白、灰髪も白い仮面も多くの人間がその身に持っているが私にはそれが誰か解った。

相手もまた、この混雑の中後ろ姿だけで私が誰か解ったようで、直ぐに用件を伝える。

「父さん達に協力してもらった。直ぐに此処は暗くなる。その内に逃げる。」

それだけ言うと、人ごみを上手く掻き分けてその場から立ち去ってしまった。そのまま一緒に連れてくれば速いのでは、などと思いながらその場に立ち尽くす。

暗くなると言うのなら、動き続けるよりも暗くなるその時を狙って動いた方が得策である。私は、そつと会場内が暗くなるのを待っていた。

微かに、耳障りな音がする。それは金属類が響かせる独特な音響。バチンツ、

その音と同時に会場内の明かりは消えた。先代の時にはなかった東の照明を姫様は使っているようだ。東の工業は凄いらしい、照明だって指一つで広い部屋の明かりを全て操作する事もできると言う、その技術は既にこの会場に取り入れているのだと、今の音とこの状況から推察できた。

突然、聞いた覚えもない音と共に消えた明かりに参列者は不安を覚え、口々に叫びあっている。

私は三人向こうも見えない暗闇の中、駆け出した。進行方向を塞ぐ人間に尽く体当たりを食らわせるが、混乱している中ではそれが明確な意思を持ったものとは思えないらしくぶつかった事に文句を漏らすだけだった。

雲の掛かった月の明かりが、バルコニーから会場に微かに差し込んで、照らしている。だが、慣れない仮面を被る参列者はこの突然の状況ではそれすらもわからないらしく、会場の四方八方で体当たりや肘撃ちを食らわせている。

ようやく人ごみから脱した私は足を一度止めた。後ろを振り返ると犇きあう参列者がまるで一つの生き物のように見える。今まで会場の後方に注目していた彼らは、前方付近にあるこのバルコニーには誰一人として視線を向けていない。

私はそつと、バルコニーに出る。このバルコニーは母さんと父さんが一緒に語り合い、微笑み会った場所だと思う。そこからは中庭の一つである、美しい薔薇庭園が見えるのだ。

バルコニーの端に近付き、景色を眺める。白や赤、黄色などと言った様々な色の薔薇が微かにもれる月の明かりに照らされて、妖艶に浮かび上がっている。この薔薇は全て茨で、触れるものを傷付けると同時に、大切なものを守る役割をしていると言う。だから、姫様の多くは此処で幼い日々を過ごすのだと。

一歩踏み出し、バルコニーの縁に触れようとした、その時だった。

「待って、」

その声は静かで、時折聞こえる会場からの声にかき消されそうな気もしたが、それでも確かに私の耳に届く。

一番、聞きたいと思うと同時に、今は一番、聞きたくなかったその声は――、私の背後から聞こえた。

（姫、様…）

#

突然、会場内の明かりが消えた。

この会場はランプなどといったものは使っていない。東の国で使われている照明だ。雷が持つエネルギーと同じものを使って、明る

く長い間照らす事ができる便利なもの。最近の交流からこの会場内の明かりは全てこれに変えることが出来た。

その明かりが消えたのだ。雷により消えることがあるらしいが、今夜は雲が少し出ているだけで雷が落ちるような天気ではない。と言うことは、誰かが意図的に消したのだ。

全てが同時に消えたと言う事は、分割したそれぞれの照明の電源を消したのではなく、全ての電源のエネルギーを管理する場所の電源を落としたのだろう。と言うことは復旧まで多少時間が掛かる。

私は会場内の【彼】の姿を捜す。【彼】は――、既に人ごみの端まで近付いてしまっている。

この暗闇は【彼】が仕組んだ事なのか、はたまた偶然なのか私には解らなかった。でも、このままではいけないことだけは私の心の全てが分かっていた。

私の手首を掴む爺の手を全力で振り払う。全力は最近出したことはなかったが、衰えては居ないようで爺の手は直ぐに離れた。

私は王座の階段を駆け下りて、会場の端を通り【彼】の目指しているように思えるバルコニーへ駆ける。

この暗闇では直ぐ近くの人間の顔も見えないため、顔を見せぬための仮面も不要なものだった。私は仮面を投げ捨て、暗闇に困惑する群衆の合間から【彼】の姿を見た。

ゆつくりと、消え去るようにバルコニーへ向かうその姿は、確かにあの路地から居なくなつたあの方を思わせて――、胸を打つ感情を抑えバルコニーの入口に立った。

髪を一つにまとめて、静かにバルコニーの真ん中に立つ後姿。その髪は黒かったが、それでも私はその人物があの方に思えてならなかった。

一步、進み出てバルコニーの縁に触れようとする。今度は、触れ

ようとするれば消えてしまうそんな気がして、私は声をかけた――、

「待って、」

その身体が静止する。今、このまま進ませてしまったなら、この方は二度と私の前には現れない。

そう、予感するものが私の中にはあった――…。

17：逃走と追跡（後書き）

アクセス増えた。（落ち着いた。）

ありがとうございます！

18：月明かりの対峙

「待つて、」

静かな声が、バルコニーの端に立つ影に届く。その影を見詰める美しい女性は、何処か乞うようにその影に声をかける。

「貴方は――、」

しかし、その先の言葉は出ず、暗闇の舞踏会を背に女性は立ち尽くすだけだった。

月がそつと顔を覗かせ、闇に包まれていたバルコニーを照らし出す。そこはまるで二人のために用意された場所のように何処か、幻想だった。

影もまた月に照らし出され、細身の男性の姿を女性の前に現していた。男は何処か焦がれるように自分を見る彼女に、気付いてはいらうだった。だが、決して話し掛けようとはしなかった。

舞踏会場から微かに聞こえる喧騒すらも此処には必要なく、ただ静かに、時間は過ぎていた。

ふと、男が動き出す。今にも立ち去りそうだったその身を、今度はその場にとどめるように、微かに彼女を向く。決して振り返ってはいない。だが、ここに居るといつているようにも思えた。

わずかだが、男と彼女の髪を遊ぶ風が、男の黒髪を一本一本浮き上がらせた。その光景を見て、彼女は何か。確信を得たように言葉を放つ。

「……街では、有り難う……」

その言葉から男は小さく息を吐き、何かを覚悟したように振り返る。

仮面から覗くその瞳は鋭く、優しさの欠片もなかった。だが、そ

の冷たい眼差しの中に何処か、悲しそうな影を湛えていた気がした。

「…運命でも、一目ぼれでもない。まして、目の前に魔法使いが現れて此処に送り出してくれたわけでもない。私は……。貴方が、奇跡を期待しているのであれば、それは間違いだ。…。紅の君――」

肯定でも否定でもない、唯事実を並べるだけの、何処か事務的な言葉。夢のようなこの場所には程遠い、人の心を飾る事もせずに見す。

そんな、何処か一線を引くような言葉にも、彼女は臆する事もしなかった。バルコニーに一步、踏み出す。

「……私は運命も、奇跡も否定しません。もしかすると魔法使いが気まぐれに、貴方を送り出したのかもしれない。…事実がどうであれ、私は、今この瞬間を信じています。」

男に歩み寄ろうとする彼女に対して、男は身を引く。まるで近くことすらも許してはいけないように。

彼女が、男の前に立ったその時に、人の気配に目を覚ましてしまった一羽の鳥がバルコニーの脇の木から飛び立った。

一羽の鳥が破った沈黙を、二度と戻すものかと彼女は男の手をとった。月明かりに輝く銀系の手袋。それは彼女を魅せようと美しく輝くが、彼女は手袋には一瞥もせず、別のものに見せられているようだった。

彼女は男の手の感触を確かめるように両手でしっかりとつかみ、胸の前に持ち上げる。その行為を眼にした男はそっと、言葉を放つ。「…仮に、魔法使いが私を送り出したとしても――、私は君に触れる権利などない。」

握られた右手を、決して握り返す事はせず、静かに、悲しげに微笑む。

「人が捨てた、捨てられた思いを集めて、私は煤と灰だらけ……。だから私は『灰被り』と呼ばれた。人と紙に触れる美しい手に、私が、触れることなど、許されない……。」

彼女の握る右手を引く。手袋が抜け、彼女の手の手の中に残るがそれすらも気にしない。

バルコニーの縁に飛び乗り、彼女に向き直る。悲しみに染まる彼女の顔を見て、男は立った一言だけ残してその場から飛び降りた。

彼女の目には男の悲痛な顔が映っていた。その表情は、見ている彼女の心をも痛めてしまうほど痛々しく――、彼女は男の思考をなぞる様に先程の言葉を口にする。

「『同じ真紅を持つ友人さん――。』」

その言葉は、残された彼女の心に新たな灯を灯した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4571u/>

（ ）な灰被り

2011年11月15日17時23分発行